

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第 6 号

相楽山銅鐸出土地の発掘調査	奥村清一郎・松本 秀人	1
古代エジプト遺跡を訪ねて (3)	小山 雅人	6
—昭和57年度発掘調査略報—		11
7. 下 畑 遺 跡	12. 長岡宮跡第123次	
8. 青野遺跡第8次	13. 長岡宮跡第125次	
9. 丹波亀山城跡	14. 長岡京跡右京第107次	
10. 深 草 遺 跡	15. 長岡京跡右京第110次	
11. 木津川河床遺跡		
資料紹介 古殿遺跡出土の注口土器・案	戸原 和人・藤原 敏晃	27
府下遺跡紹介 9. 千歳車塚古墳 10. 長者森古墳		31
長岡京跡調査だより		37
教育委員会だより		40
センターの動向		45
府下報告書等刊行状況一覧		47
受贈図書一覧		51

1982年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版1 相楽山銅鐸



A 面

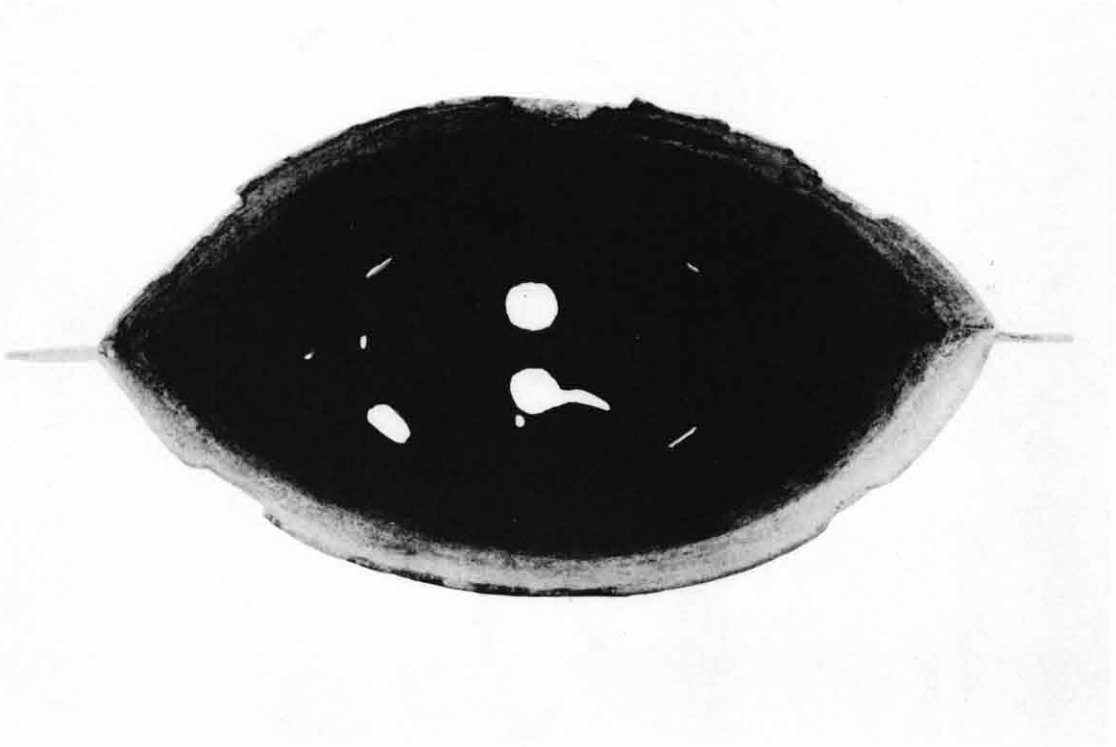
図版2 相 楽 山 銅 鐸



B 面

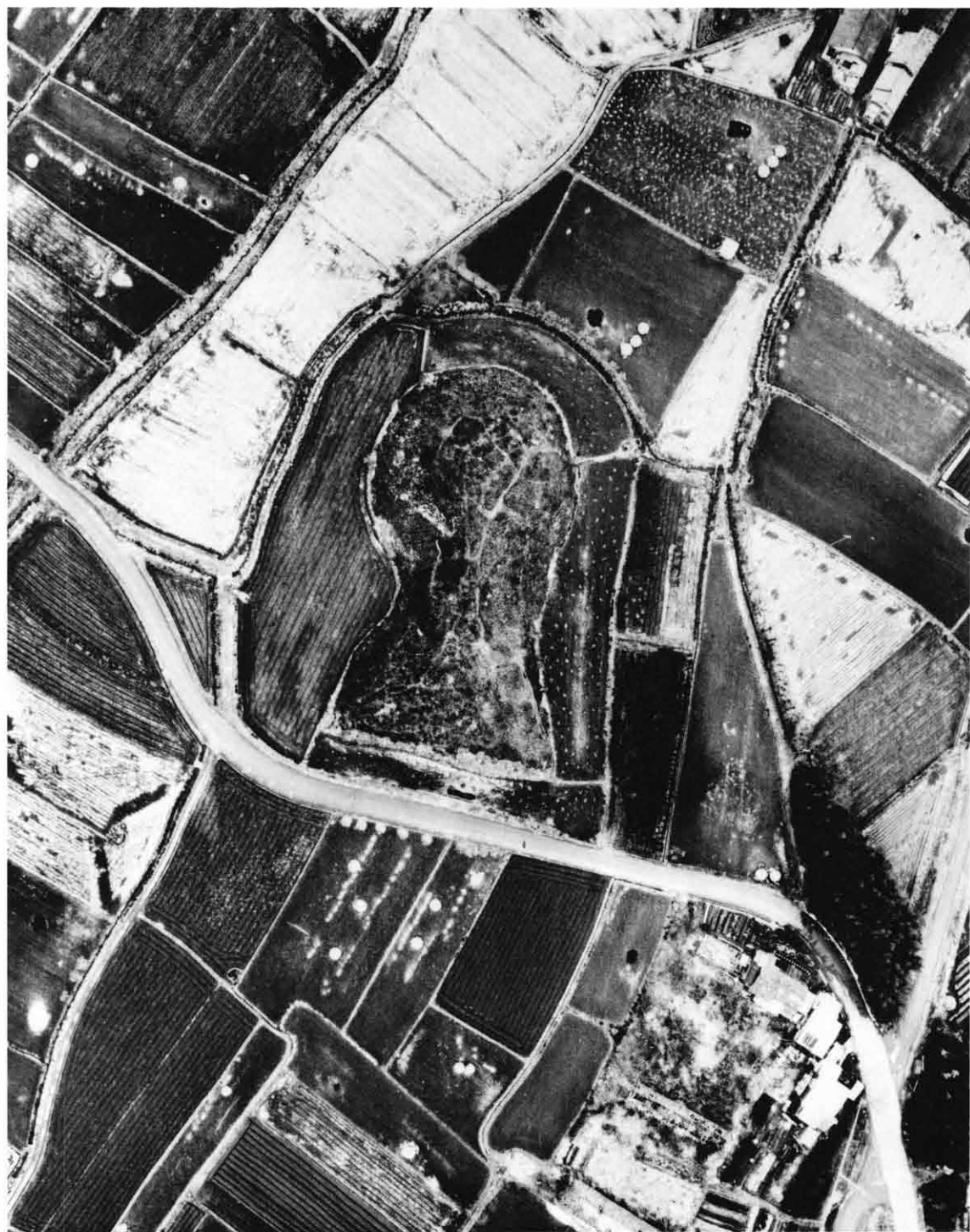


(1) 鈕 (A面)



(2) 鐸内

図版4 千歳車塚古墳



## 相楽山銅鐸出土地の発掘調査 &lt;図版1～3&gt;

奥村清一郎・松本秀人

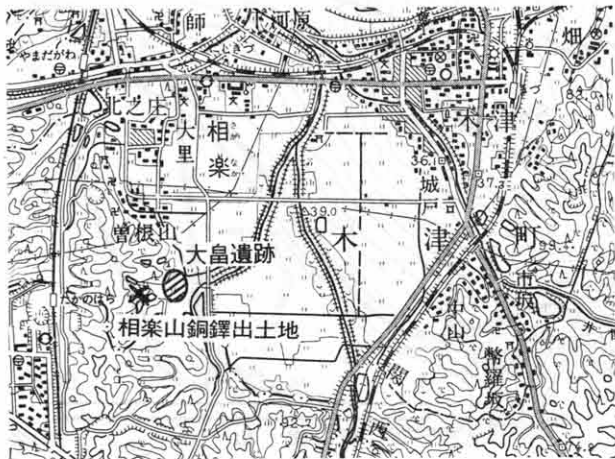
## 1. はじめに

昭和57年6月12日、京都府と奈良県との府県境付近の通称平城山丘陵の一面から、製襖樽文銅鐸1個が発見された。はじめに通報を受けた奈良市教育委員会文化財課長田辺征夫氏の実査によって、出土地が京都府に属していることが確認され、急遽、木津町教育委員会が主体となって出土地の発掘調査を実施することとなった。現地調査には、昭和57年7月5日から同8月14日までの約1カ月半をあてた。

## 2. 銅鐸発見の経緯

昭和57年6月12日午後3時30分頃、平城ニュータウン造成予定地内の樹木伐採・抜根作業に従事していた倉田周次・近藤信雄両氏が、ユンボで直径20cm前後のナラの木を掘り起こした時、木の根とともに地上に放り出された銅鐸1個を発見した。

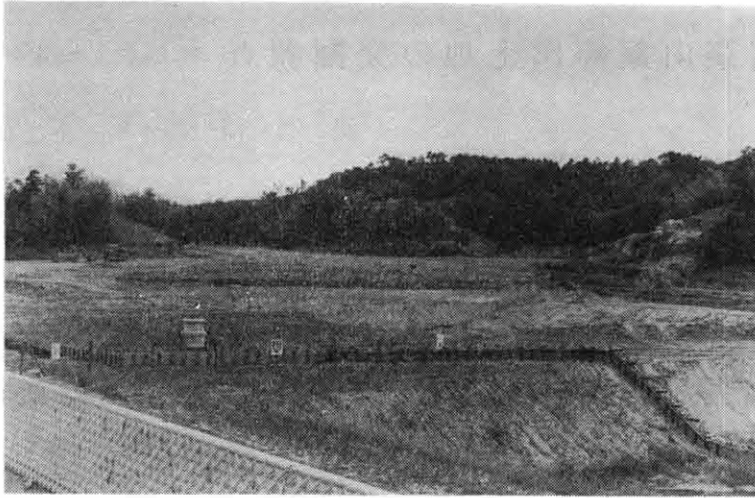
発見現場（京都府相楽郡木津町大字相楽小字相楽山47番地）は、歌姫街道沿いに奈良県から京都府へ入った所の左手の丘陵地で、西から東へのびる丘陵支脈の南斜面の稜線から少し下がったところである。出土地の標高は約67m、平野部との比高差は約20mを測り、稜上に立つと木津平野を一望のもとに見渡すことができる。なお、本銅鐸出土地に最も近い銅鐸出土地として、南西約3.3kmの位置にある奈良県秋篠銅鐸出土地が知られている。



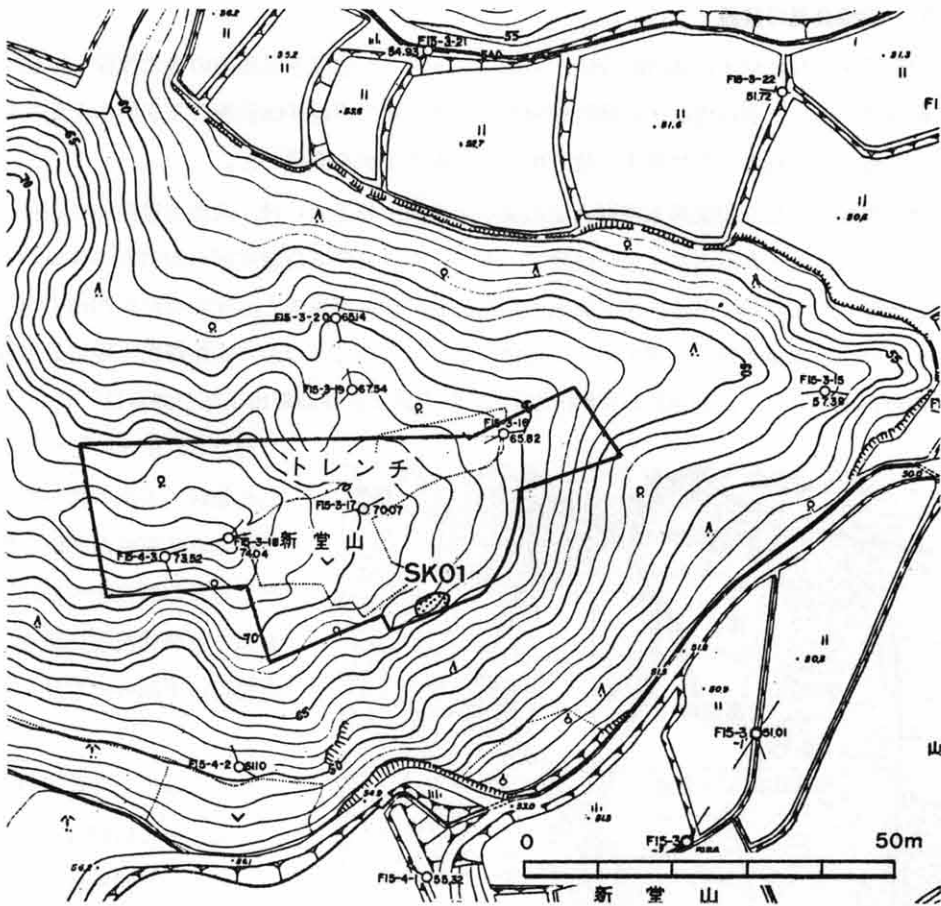
第1図 調査地位置図 (1/50,000)

発見者倉田氏の話や出土した銅鐸の表面の数か所に認められる傷跡などから類推し得た銅鐸出土地の旧状および埋蔵状況等に関する所見は、下記のとおりである。

- (1) 問題のナラの木が生えていた周囲は、わずかながら凹地状を呈していたらしいこと。



第2図 銅鐸出土地遠景



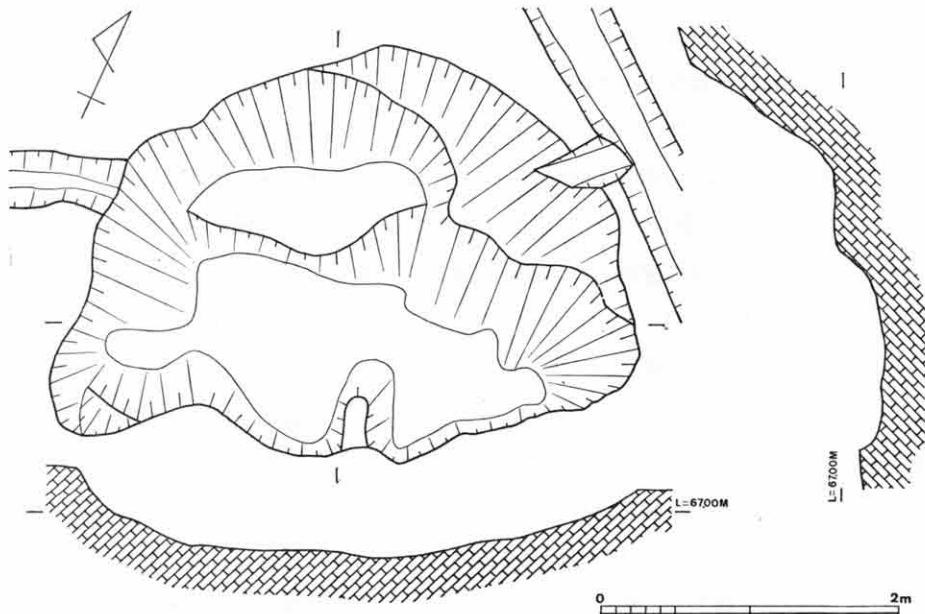
第3図 相楽山銅鐸出土地発掘調査図

- (2) 銅鐸は、現地表下1m前後のところに埋もれていたらしいこと。
- (3) 正確な位置・出土状態は明らかでないが、銅鐸は錆化の著しい1面（B面）を上を、鈕を尾根の先端側すなわち東側に向けて横に寝かした状態で地中に埋もれていたらしいこと。

### 3. 調査の概要

調査は、①銅鐸出土地点を精査し、埋納施設の存否を確認する、②丘陵全体を可能な限り掘り広げ、他の銅鐸埋納施設の有無を調べる、の2点を主たる目的として、昭和57年7月5日に着手した。その結果、①については銅鐸埋納に関係する可能性のある土壌SK01を検出したが、銅鐸の据え付け痕等は既に失われていた。伴出遺物についても、既に発見されている銅鐸を除いて皆無であった。一方②については、機械力をフルに活用して約1400㎡にわたって掘り広げてみたが、他には遺構・遺物ともに検出できなかった。

土壌SK01は、東西3.8m、南北2.4mを測る半円形の土壌で、深さは丘陵斜面の高位から計測すると約1.2m、低位から計測すると0.1mを測るが、底面は多分に抜根時のユンボの掘り方の形状をしめしているものと推察される。これに対し、北側の壁面の中位よりやや下がったところで、長さ1.6m、幅0.55mを測る不自然なテラスを検出した。これが銅鐸埋納壇の残欠となる可能性は十分ありうるが、確証は全くない。



第4図 SK01 実測図





第5図 SK01 全景

なお、調査期間中、調査地の東方約200mの位置で、本銅鐸の埋納に関する集落遺跡に伴うものと推定される弥生中期以降の遺物包含層（大島遺跡）を新たに確認した。これについても、引きつづき発掘調査が実施され、弥生中期の方形周溝墓や竪穴住居が検出されるなど貴重な成果が得られたが、詳細については機会を改めて報告することとしたい。

#### 4. 銅 鐸

出土した銅鐸は、佐原氏の分類の扁平鈕式に属し、六区袈裟襷文を飾る総高40.5cmの銅鐸である。細部の法量は表1を参照されたい。

銅鐸は、土中にあった時から鐸身A面上部が凹み、一方の鈕脚が外れており、発見時にもう一方の鈕脚も折れ、一部の文様を欠いたが、銅質や形状の保存状態は極めて良い。

鈕は、外縁に2帯（外側を1区、内側を2区とする）、菱環と内縁に各1帯の計4帯の文様帯をもち、外縁と内縁に鋸歯文を、菱環に綾杉文を飾る。鋸歯文には、鋸歯内に右上—左下の斜線をみたまの(L)と、右上—左下・左上—右下の両斜線をみたまの(L|R)の二種があり、この二種の組み合わせ方はA面とB面で異なる。A面は、外縁をLで統一し、内縁にLとL|Rを2対1の比で交互に配する。B面は、外縁の2区の文様帯のうち1区をLで統一し、2区をLの中にか所L|Rを混入させ、内縁をすべてL|Rとする。直線を境に異なった傾きの斜線を連ねた綾杉文は、中央で「X」字形となるように左右対称に施文し、両鈕脚と文様帯内3か所に施された3本ずつの平行線により4区に区切られる。

鐸身は、斜格子を満たした縦3帯・横4帯の帯による袈裟襷文と、鋸歯文と平行線文をみたました下辺横帯によって飾られている。袈裟襷文は中央縦帯のみ両側に輪郭線を入れる。

総	高	40.5cm
鐸	身 高	30.0cm
鈕	高	10.5cm
舞	部 長 径	14.0cm
舞	部 短 径	8.8cm
裾	部 長 径	21.6cm
裾	部 短 径	12.0cm
鱗を含めた裾部長径		26.9cm
内面突帯の位置		2.7cm (裾からの高さ)
総	重 量	1.9kg

表1 相楽山銅鐸法量一覧表(略測値)

鈕との境と裾端に5・6本の平行線を入れる。鱗の鋸歯文にも鈕でみられた二種があり、A面はすべて鋸歯文Lとするものの、B面はLの中にか所L|Rを混入させている。鈕・鱗を通じ、この2種の鋸歯文は、一貫した規則性がなく、製作工人の戯れのような感じがする。

飾耳は、鱗の上部、鈕との境に施された平行線の外側に半載同心円のものが2個1対飾られる。

なお、袈裟襷文の区画内を縦帯・横帯よりも一段低く铸造した銅鐸は、数個あり、最も近い出土例は、大阪府八尾市恩智都塚山銅鐸である。

(奥村清一郎=京都府教育庁文化財保護課技師  
松本 秀人=木津町教育委員会社会教育係技師)

袈裟襷内の6区画と裾部は無文であるが、縦帯・横帯よりも一段と低く鑄出し、さらに研磨を加えて文様帯を浮き出させる役目を果たしている。型持穴は、片面の上部と裾部に2つずつの4つと舞に2つが開く。舞と鐸身上部の型持穴は円または楕円形、裾部は矩形を呈す。鐸身内には裾端から2.7cmの位置に断面半円形の突帯がめぐる。鐸身は、両面に数か所の鑄損じがみられ、大きなものは鑄掛けを行い、補刻を施している。

鱗は、鈕の外縁1区文様帯から裾端までに付く。文様は、鋸歯文を主体とし、

## 古代エジプト遺跡を訪ねて (3)

小山雅人

### IV 新王国(その1)

第12王朝は、その後半に至って、名実ともに中王国の名に恥じない強力な中央集権国家を築きあげたが、数代の王の後、もろくも滅亡してしまう(前1786年頃)。第13王朝がこれに取って替ったが、エジプトに昔日の勢いはなく、間もなくシリア方面から来たヒュクソースに下エジプトを侵略されてしまう。上エジプトのテーベに興った第17王朝は、代々ヒュクソース(「異国の領主」の意)に対して国土解放戦を挑んだが、二輪戦車に代表される新兵器を有するアジアの民にはなかなか歯が立たなかったらしい。

第17王朝最後の王カーモセの対ヒュクソース戦に関しては、貴重な文献資料がある。今世紀初頭、トットアンカムーン(ツタンカーメン)王墓の発見で有名な英国のカーナヴォン卿の(出資による)発掘で出土したタブレット(メソポタミア考古学では粘土板を指すが、エジプトでは学童の筆記ノートに使われた木製の書板)に、カーモセ王の初期の戦いの様子が書かれてあったのであるが、約半世紀後、1954年カルナックで出土した大石碑には、



第1図 ナクトの墓内のヒエログリフ(第18王朝)

この王とヒュクソース・アポーピ王との攻防がやや物語風に語られていたのである。発掘による文献資料の新発見と言えば、日本では木簡・墨書土器・鉄剣銘等に限られ、数語、多くてもせいぜい数行のものであるが、エジプトに於ける発掘の場合、文字資料の出土は日常茶飯事と言ってよい。しかし、カーモセのステラ程の史料価値を持つ資料の出土は珍らしく、1950年代出土のこの資料が、今でも「最近発見された重要史料」といわれるほどである。この石碑は、ルクソール博物館に展示されており、筆者も初めて実見することができた。

このカーモセ王の後を嗣いだのが、その弟アハモセ（前1575～1550）で、ヒュクソースを放逐したこの王から第18王朝が始まり、同時に新王国時代の開幕である。古王国の荘重、中王国の質実に対して、新王国は華麗極まりない文化が咲いた時代である。建築は隆盛を極め、貴族達はこぞって華麗な墳墓を営んだ。有名なトゥタンカムーン王墓出土の遺物が、この時代の美術の代表であるが、例えば宝飾技術に見られるように、豪華絢爛ではあるが、古王国・中王国時代の残された数少ない遺品と比べた場合、かなり技術水準の低下が認められる。新王国の後半、ラメセス朝と呼ばれる第19・20王朝になると、この傾向は一層強くなり、建築にしても美術にしても非常に大味で、つまらないものである。これは筆者が審美眼を欠き、エジプトの遺物に対して、その言語や文学程には情熱をもって接していないからかも知れない。今回の旅行で多くの「美術品」の実物に接したが、震える程の感動を受けたのは、カイロ博物館のヘシレーエの板碑（第3王朝）と通称「村長像」（実は神官カアペル像、第5王朝、一説に第4王朝末）だけであったことを告白する。前者は、古拙さを払拭した最古の貴族の浮彫りとヒエログリフの一つであり、その文字の古さと美しさにいたく感動を覚えたのであったが、後者は美術書で嫌になるほど見慣れ、さして実物を見たいとも思っていなかった。ところが、いい加減な説明をしてチップをせびろうという警備員を追い払いつつカイロ博の中をブラブラ巡って、この「村長像」に出会った時、決して等身大でもなく（高さ110cm）、木製の像はいたる所ヒビ割れているにも拘らず、ここに本物の古王国時代のエジプト人がいると感じたのである。

話を新王国に戻そう。ルクソール市は、新王国時代の古都テーベの故地であり、後世の、特にプトレマイオス朝やローマ帝国領時代の修理や増築部分が多いが、今も新王国時代の神殿建築が、傷んではいるが残っている。更にナイルを渡った西テーベには、諸王の葬祭神殿があり、岩山の谷筋には王家の谷・王妃の谷がある。われわれ一行は、ルクソールに滞在した一週間のある日、車で王家の谷の諸王墓を見た後、その東の岩山に登った。頂上からは、眼下に西テーベ、ナイルの向こうにテーベの神殿が見える。東へ下りて行くと、古代エジプト建築の最高傑作と言われる第18王朝のハッシュェプソーウェ（ハトシェプスウ



第2図 西テーベの岩山から東方のナイルを望む



第3図 デール・エル・バハリの神殿（第18王朝）

ト) 女王の葬祭殿(地名を採って、デール・エル・バハリ神殿とも呼ぶ)を真下に見下ろす道に出る。この道は、新王国時代にデール・エル・メディーネに住む墓地労働者達が、王家の谷あるいは王妃の谷へかよった古道である。

この墓地労働者達の村は、長年フランスのオリエント考古研究所によって発掘調査され、夥しい史料を提供した。特にオストラカ(墨書陶片・石片)には、売買(物々交換)の証文等の経済文書、職場(墓地)での出勤簿(欠勤の理由が面白い——例えば、夫婦喧嘩による負傷)や人員配置名簿等の実務文書があり、また、ヒアリングをやらされた学童による古典文学作品の写本等も数多く出土している。墓地労働者というが、むしろ王族の墓を造り、壁に絵や文字を飾った技術者・芸術家であり、中流階級に属する国家公務員であった。新王国の末期になり、食料の配給がとだえると、ストライキをし、パンよこせデモを行ったことを詳しく記したパピルスも残っている。

デール・エル・バハリに葬祭殿を建てたハッシュプソーウェ女王の治世以後、エジプト美術は非常に優しさにあふれた綺麗なものになり、第18王朝の貴族の墓に描かれた人物の顔など、敢えて言えば、少女漫画の主人公のように可愛らしい。われわれの一行は、貴族の墓に入る度に、男共は壁に描かれた宴席の美女達の品定め、女性軍は、若々しく表現された墓の主を見つけて、「キャー、この子可愛い!」等と興じたものである。それに引きかえ、諸王の墓は神学的・密教的な図像や呪文ばかりで、面白味に欠ける。しかし、これは宗教を苦手とする筆者の偏見かも知れない。ヒエログリフを勉強している人の中には、筆者に言わせれば退屈以外の何物でもない『死者の書』を読みたいからという人も少なくないのである。

エジプトの観光ポスターや旅行案内等に、やたら「神秘」という字が目につく。また、考古資料にせよ文献資料にせよ、葬祭・供養関係のものが圧倒的に多数を占める。しかしながら、墓壁画や文学作品、また上述のストライキ・パピルス等の日常生活を窺わせる資料から知られることは、古



第4図 第18王朝の貴族の女性

代エジプト人がいかに現世的であったかということである。王墓に見られるような神学的な図像や呪文は、極く一部の神官のみが知ること、王侯貴族も民衆も、信仰や迷信は当然持っていたであろうが、現世をいかに生きるか、いかに楽しむかという方が主目的であり、むしろその為に、神々を利用していただけよう。豪華な貴族の墓が示すのは、この世は仮のものであるから来世の至福の為に厚葬したのではなく、この世の楽しみを来世にも味わいたいという願望なのである。彼岸に達する（この表現は仏教的であると同時にエジプト的である）為に、いかにして神々を斯くかという呪文が、『死者の書』にある。もっとも一巻を購えない庶民はその『死者の書』の切れはしを副葬できれば上等であったのであるが……

(小山雅人=当センター調査課調査員)

## 昭和57年度発掘調査略報

## 7. 下 畑 遺 跡

所在地 与謝郡野田川町字三河内810  
 調査期間 昭和57年7月22日～10月1日  
 調査面積 約600㎡

はじめに 京都府教育委員会は、府立加悦谷高等学校の校舎老朽化に伴い、新校舎の増改築工事を計画した。当該地は下畑遺跡として周知の遺跡であり、前年度の立合い調査では平安時代の遺物が出土している。また、学校敷地の周辺より、以前に弥生時代遺物の出土が認められている。このような状況から、今回の調査で下畑遺跡における遺構等の検出が期待された。

**調査概要** 調査地は、前年度調査地の西に位置する。調査地に近接する北西部には、粗粒花崗岩質の山脚がせまり、その山脚端の一部は学校建設当時に削平されている。調査予定地内に幅3mのトレンチを3本設定し、重機による掘削を開始した。調査地の北部(約1/3)は山脚削平部であり、残り2/3は青灰色粘質土及び砂層の堆積が南方向へ緩い傾斜を

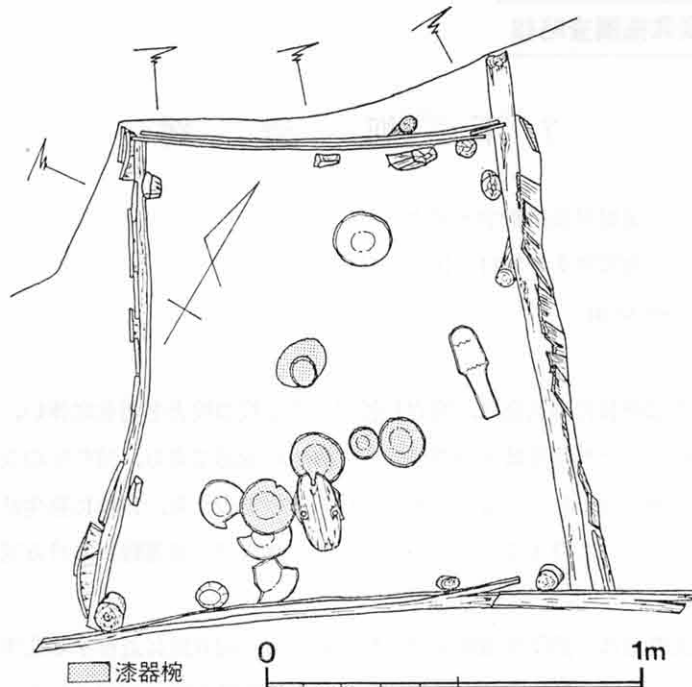
もって下っていた。調査地の南端近くで地表下1.4m付近に遺物包含層(青灰色砂層)が広がり、平安時代後期とみられる井戸(SE01)が検出された。また、後の時期と考えられる木製杭列が認められた。

**SE01 (第2図)** この井戸は一辺約1.2mの方形を程する木枠組みの井戸である。井戸枠は丸木杭及び角杭によって固定されていた。井戸枠の南面と北面は板材を横方向に組んでおり、



第1図 調査地位置図





第2図 SE01遺物出土状況図

北面の板材は大きな一枚板を使用していた。井戸枠の東面及び西面は横に棒を一本渡した後、その外側に木矢板を打ち込んでいた。井戸の最深部は井戸枠上端より約1mを測り、底部の形状は楕円状を呈している。

井戸内からは黒色土器の他、漆器碗(7)・下駄(1)・しゃもじ状木製品(1)・はし(2)・曲物底(1)等の木製品が出土している。また、自然遺物として多量の種子(トチ・クルミ)が出土した。井戸内における遺物の出土状況は、その大部分が南端付近に集中し、井戸底より若干上部に位置していた。遺物のうち下部には黒色土器碗が存在し、それらの大部分は口縁部の一部が欠失していた。漆器碗は7点のうち2点が井戸の上部からの出土であり、他の5点(うち1点は皿)は一括投棄された状態で出土した。しゃもじ状木製品は、その両面にクギ状の先端部のするどい金属(クギ状)によるとみられる、ひっかき痕(鋸歯文及び直線文)が認められた。

井戸の掘形は、井戸枠の南方向に大きく広がり、掘形内には大型の板材を水平方向にかさねて設置し、小さな杭と石により固定していた。井戸枠の西には板材はほとんど存在せず、かわって檜等の樹木の枝を敷きつめていた。この井戸の掘形内からも多量の黒色土器及び土師器等が出土している。この井戸の時期は出土遺物等から12c代と考えられる。

**杭列** この杭列は、井戸の東約2.5m付近に存在し、南北方向にトレンチ外へ延びる。



第3図 SE01 全景

時期はSE01以降のものと考えられる。

この他にSE01周辺より、黒色土器片・土師器片・須恵器片・輸入陶磁器片等が出土し、時期的には12～13cの遺物が大多数を占めていた。また北宋銭（至道元宝）も1枚出土している。

**まとめ** 今回の調査結果から、下畑遺跡は平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡であることが判明した。調査地内において住居跡等の痕跡は認められなかった。しかし、井戸が検出されたことから、調査地近辺に集落が存在することは確実であろう。

井戸（SE01）は、その底部を涌水層である砂層にまで掘り下げておらず、黒色粘土層が底面であった。また掘形の状況から、南方の湿潤な部分からの集水及び天水を利用した井戸であったと考えられる。井戸内における遺物は出土状況及び内容から、水に関連する何らかの祭祀に使用されたと推察される。

（竹原 一彦）

## 8. 青野遺跡 第8次

所在地 綾部市青野町西吉美前・上ぬけ

調査期間 昭和57年7月5日～10月18日

調査面積 約4,300㎡

はじめに 今回の調査は、福知山地方建設局による由良川改修工事に起因するもので、当該地が青野遺跡が立地する微高地を含んでいるところから、本年度は先ず試掘調査として実施された。調査地は、白瀬橋の西、由良川の南岸から約60m南に、南北約30m、東西270mに細長く広がる。東端部の50m南には、この遺跡に初めて発掘調査の鍬が入れられた青野遺跡A地点（関西電力青野変電所）がある。今回の調査では、周辺の地形の観察か



第1図 調査地位置図

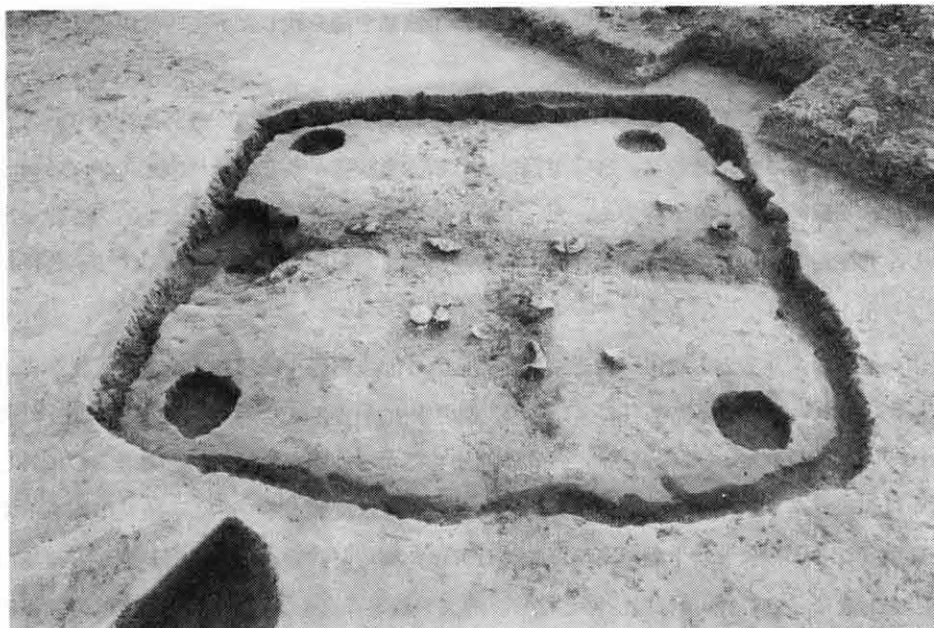
ら、遺跡の範囲の西限や、A地点で検出された土壇墓や溝を残した弥生時代中期の人々の住居跡の有無等の確認が期待された。

**調査概要** 東西に細長い調査地は、調査結果から東・中央・西の3地区に分けられる。

東地区で検出された遺構は、ほぼ東西に流れる弥生時代から奈良時代の末にわたる数条の溝と、平安時代のピット等であった。下層の溝からは、若干の土器や太型蛤刃石斧が出土し、弥生時代中期に位置づけられ、上層の溝からは、7～8世紀の土師器・須恵器片がかなり出土した。

中央地区は南北方向の幅広い旧流路で占められる。流路埋土の層は、上から大まかに、①表土(厚10cm)―②耕作土(40cm)―③3期の水田耕作土(70cm)―④褐色シルト(150cm)―⑤青灰色シルト(30～40cm)―⑥砂礫層を呈する。東岸の傾斜が急であるのに対し、西岸は遠浅であり、南北から東西へ方向を変える大きな湾曲を示唆する。流路の幅を示すと見做される④褐色シルト層の東西両端間は37mを測るが、③水田耕土層が広がる遠浅の地形をも含めると、約65m幅の流路となる。地図や航空写真を見ると、国鉄舞鶴線の鉄橋の辺りから、今回の調査地へ向かって、幅50～60mの帯状に湾曲した水田地帯があるが、これこそ、今回検出した流路の延長であり、現在は南から久田山に当たって東へ直角に曲がって流れている由良川の旧河道であったと考えられる。又、その時期については、確認し得た限りでの最下層の⑥砂礫層の上層から7～8世紀の多量の須恵器・土師器片が出土しているところから、奈良時代末まではここを由良川が流れていたらしく、③水田耕土層の底から瓦器や土師器片が数点出土しているので、平安時代の終わり頃には④シルト層の堆積は終わり、水田化したと思われる。上限については明確な資料がないが、流路の両岸から数10mの間には遺構・遺物が殆どと言ってよい程見られず、また弥生時代から奈良時代に亘る青野遺跡が立地する自然堤防微高地が、この旧河道の東岸に沿って広がっていること等から、人々がこの地に住み始めた頃、既に河道はこの位置を流れていたと推察される。

西地区は、流路の西、南から三角形に突出している台地の先端部にあたる。トレンチを入れる前に、既に付近の畑地からかなりの量の土器片を表採していたが、予想通り、竪穴式住居跡5基(他に2か所それらしい土色の変化)・溝2条・土壇1基を検出した。今回の試掘調査で完掘したのは最北端に位置する住居跡1基と土壇にとどめ、残りは、本調査に委ねることとした。その規模・形態を確認した住居跡は、推定直径約8mの円形住居跡1基、1辺4m強の小型方形住居跡2基、1辺6～7mの中型方形住居跡2基の3群があり、検出面の整面時に出土した土器片や切り合い関係及び遺構の方位等から、弥生時代後期・移行期(所謂庄内併行期)・古墳時代前期(布留併行期)の3時期が認められ、この3時期は、それぞれ上記の3群の住居跡に相当するようである。完掘した住居跡は、小型方形住



第2図 西地区竪穴式住居跡S B05

居で、周溝が四辺を周る。四隅に柱穴が4個、中央に炉跡、北辺と南辺に1基ずつピットを検出した。床面の遺物は、青野遺跡35U06や園部町曾我谷遺跡溝状遺構の一括資料と併行し、福知山市半田遺跡の編年第Ⅱ期に位置付けられる。

まとめ 調査地中央地区の由良川旧河道の検出によって青野遺跡の西限が明確にされ、また東地区で溝以外の顕著な遺構が認められず、遺物も少量であったことから、今回の調査地点がほぼ青野遺跡の北限でもあると考えられる。また、由良川旧河道の時期がおそらく弥生時代から奈良時代末葉に亘ることが知られた。これは単に青野遺跡が当時由良川東岸にあったということのみならず、北の久田山遺跡・古墳群と陸続きであった可能性にもつながる。更に、旧由良川の西の集落は新発見の遺跡であり、上述の5基の住居跡を検出した4本のトレンチは、この台地の15%を占めるに過ぎず、本調査での全面発掘によって、新たに青野西遺跡と呼ぶことになったこの集落の姿が明らかにされることを期待したい。

(小山 雅人)

## 9. 丹波亀山城跡

所在地 亀岡市横町23  
 調査期間 昭和57年10月18日～11月6日  
 調査面積 約236㎡

はじめに 丹波亀山城は、天正年間に明智光秀により築城された城で、慶長・元和年中に全城が完備した。保津川の河岸段丘上に立地し、南側に開けた形状をしている。寛政5年(1793)「山陰丹府桑田亀山図」によれば、三重堀を廻らし、惣郭堀内に城下町を含む典型的な近世城郭の形態をとっている。

現在、城主の「御館」は京都府立亀岡高等学校の敷地になっており、今回の調査は校舎増改築にともなうもので、「御館」の構造が判明するものと期待された。

**調査概要** 調査は、4m×25mのトレンチを入れることから始めた。トレンチの南端で、大きな溝跡(S D01)が検出できたので、方向・大きさ等を確認するためトレンチを東西に拡張した。尚、トレンチ北側では何ら遺構は発見できなかった。

S D01は、幅4.2mの溝で、ほぼ、東西にのびている。遺物は瓦片が数点出土した程度で、時代決定できるものはほとんどみられなかった。

S D01の性格だが、寛政5年の絵図から現在の1/2500の地図上に亀山城を復原すると、外堀の北端が亀岡高校の敷地内に一部かかることがわかる。今回検出したS D01は方向・位置がそれと一致していることが興味深い。また、昭和10年までこの辺りに存在した「築山」が重要な手がかりになる。



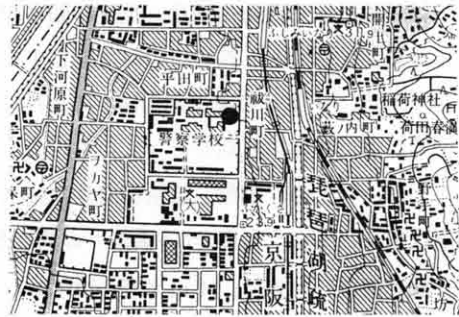
調査地位置図 (1/25,000)

当時の写真を観察すると、高さは約3mあり、下の方に少し石垣らしきものもあることから、「築山」は城の周囲を廻る土塁の可能性が強い。しかも、その位置は、当調査地の中央部にあたると思われる。これらのことから、S D01は外堀の可能性が強いが、堀にしては幅が狭いことや、遺物の数量が少ないこと等、若干の疑問もある。(土橋 誠)

## 10. 深 草 遺 跡

**所在地** 京都市伏見区深草稻荷鳥居前町  
**調査期間** 昭和57年10月5日～10月30日  
**調査面積** 約360㎡

はじめに 稲荷山が南西に向かって傾斜しつつ、盆地の平坦地に移り変わるあたりに深草遺跡は位置する。標高約20～24mの沖積地である。この深草というところは、縄文時代から歴史時代に至る多くの遺跡や史蹟が存在する。とりわけ、弥生時代の著名な遺跡である深草遺跡が代表的なものである。今回の発掘対象地もこうした重要な地域に入っており、発掘調査が必要とされたわけである。調査に至る経緯は、当地の京都府警察学校敷地内で、東側の師団街道に面した場所に水難救護訓練用プールが設置されるに際し、京都府警察本部の依頼を受けて実施するに至ったものである。



調査地位置図 (1/25,000)

**調査概要** 調査方法は、調査対象地約360㎡の内に幅約3mの細長い発掘区画を配し、掘削を行った。深度は平均約1.3mである。

まず土層について記したい。場所により若干の相違はあるが、上層から順に列記すると、①表土層、②暗褐色粘質土層、③黒色砂質土層、④灰褐色砂礫層、⑤黄白色粘土層となる。②と③は、木の根や瓦礫を含む有機土層で、特に③層は木炭や植物遺存体を多く含み、東にいくほど厚く堆積している。

次に、遺構と遺物についてであるが、今回の調査では、遺構はもとより、明確な遺物すら検出できなかった。というのは、昭和20年代半ばに当調査地に掘り込まれた人工池が、ほとんど発掘区の全域を包含していたためである。この池は、最も深い所で地表下約3.2mを測る。そして、この埋土中より現代の瓦礫・陶磁器に混じって、比較的古い時期と思われる胎土・焼成とも不良な土器小片が2点出土した。時期等の詳細は不明である。

**まとめ** 昭和29年に初めて弥生時代遺跡として紹介されて以来、多くの成果と議論を提起してきた深草遺跡（西浦町一带）の北限に位置する地点であったが、今回の調査では好資料を検出し得なかった。しかしながら、今後とも付近における分布調査、発掘調査の必要性を痛感する次第である。  
(黒坪 一樹)

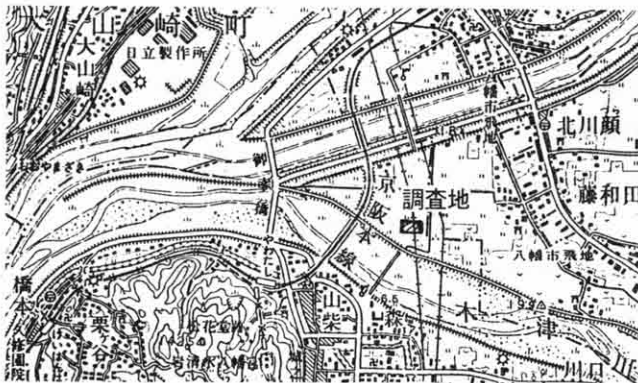
## 11. 木津川河床遺跡

**所在地** 八幡市八幡小字源野・焼木  
**調査期間** 昭和57年9月3日～10月4日  
**調査面積** 約600㎡

はじめに この調査は、上記所在地に京都府木津川流域下水道の浄化センター水処理施設建設が計画されたため、その工事に先だち、実施したものである。

調査地は京都盆地南部で、木津川・桂川・宇治川の合流点近くに位置し、現在はその北と南をそれぞれ、木津川と宇治川の堤防によって画されている。先年まで、水田として利用されていた調査地付近は標高約10mを測り、遺物散布等は確認されていなかったが、南を流れる木津川河床では以前から、弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉等、各時代に亘る遺物が採集されていた。このことから、この付近に集落の存在が予想され、その範囲も河床面に留まらず、周辺に広がる可能性が高いと考えられていた。

**調査概要** 浄化センター建設予定地は広範に亘るが、今回の調査は本年度工事予定地に限って行った。まず、対象地に5×20mのトレンチを5本入れ、遺構、遺物の有無および土層を確認し、その後、比較的遺物の多く出土した部分の拡張を行った。基本的な土層は①耕作土、②灰青色粘質土、③暗灰色粘質土（含細砂）、④暗灰色粘質土、以下無遺物層である砂層となる。砂層はトレンチにより、やや色調が異なるが、建設工事に伴うボーリング調査では、地表下5～7mまで続いている。砂層を掘り下げると湧水が始まり、降雨後は④層下部においても水が湧き上がる状態であった。耕作土下、④層までは有機物を多く含む粘質土であり、所々に細砂を混じえるが、粗砂あるいは礫等を一緒に含む層はなく、

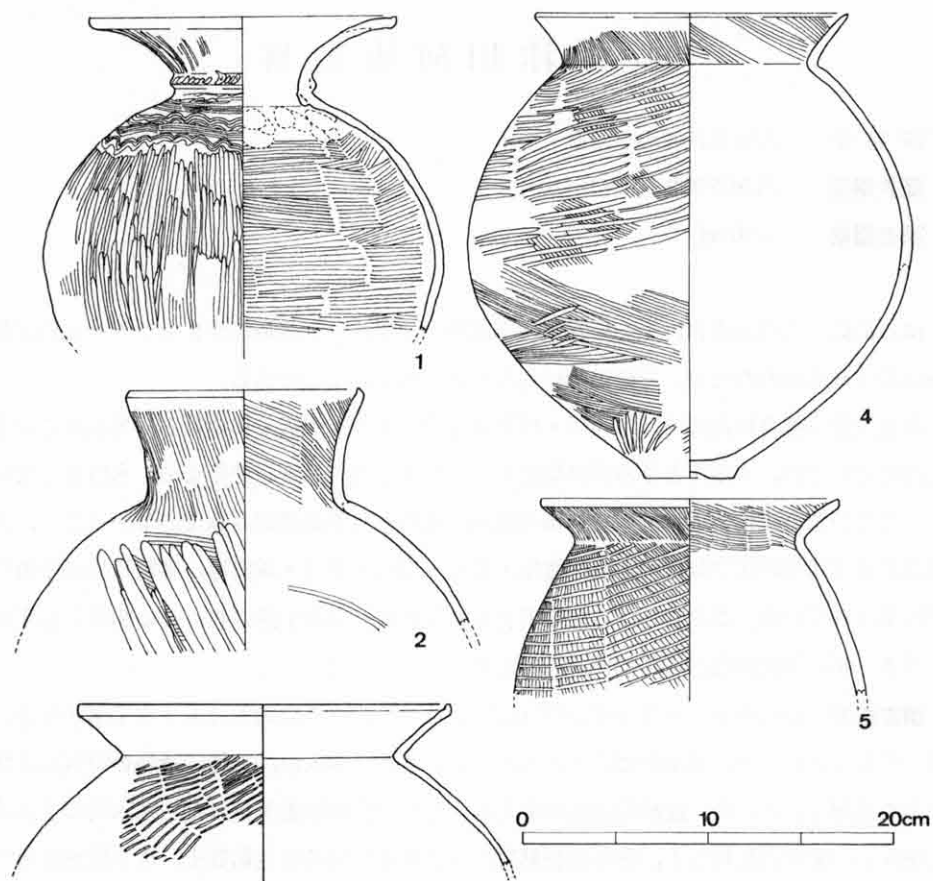


第1図 調査地位置図 (1/50,000)

比較的静かな泥水の移動によって堆積したものと考えられる。

遺構は③層上部で近世の杭・畦畔を検出したが、それ以下では遺物や礫の集中する地点の確認に留り、遺構とし得るものは検出できなかった。③層中の遺物は磨滅した小片





第2図 出土遺物実測図

が多く、近世のものも含まれる。④層では中世以前のもものが混在するが、最もよくまとまって出土したのは弥生時代末から、古墳時代前期にかけての資料であった。この時期の遺物には壺、甕、器台、高杯、鉢、蓋等がある。また中世の遺物としては、瓦器碗、釜、插鉢、瓦、磁器皿、銭貨等がある。

今回の調査で、河床遺跡の遺物の広がりがこの付近にも及ぶことが確認できたが、遺構面等は検出し得ず、集落の様相に触れることはできなかった。また、木津川河床では、弥生時代以降、各時代の遺物が見られるのに対し、ここでは限られた時期だけが出土した。現在は河床・水田と化しているこの付近も、かつては交通の要所として、あるいは石清水八幡宮との関連等を含め、資料の増加を待ちつつ、検討してゆかなければならない問題を多く残している。

(長谷川 達)

## 12. 長岡宮跡第123次（7AN7F地区）

**所在地** 向日市寺戸東野辺  
**調査期間** 昭和57年7月10日～9月15日  
**調査面積** 約600㎡

**はじめに** これは向陽保健センターの新築工事に伴う埋蔵文化財に関する発掘調査の略報である。調査地は長岡丘陵の南端付近に位置し、現在は平坦地である。長岡京条坊復原図によれば、朝堂院の北方にあたり、各種官衙関係建物が構築されていた可能性の高い位置にあたる。また、長岡宮造営以前の弥生・古墳・奈良時代の遺跡の存在が、今までの調査から充分予想された。

**調査成果** 今回の調査で検出された遺構は次のとおりである。

- (1) 建物, 土壇, 溝 〔近世〕
- (2) 土壇, 溝 (細い南北溝 田畑に関係する溝である。) 〔中世〕
- (3) 溝 (南北方向に十数条検出された。これは(2)の溝と同じ性格をもつものだが, 方位が若干異なる。) 〔平安時代〕
- (4) 建物 S B01, 雨落溝 S D02 (第2図) 〔長岡京時代〕
- (5) 溝 (東西溝) 〔奈良時代〕
- (6) 土壇 〔弥生時代〕

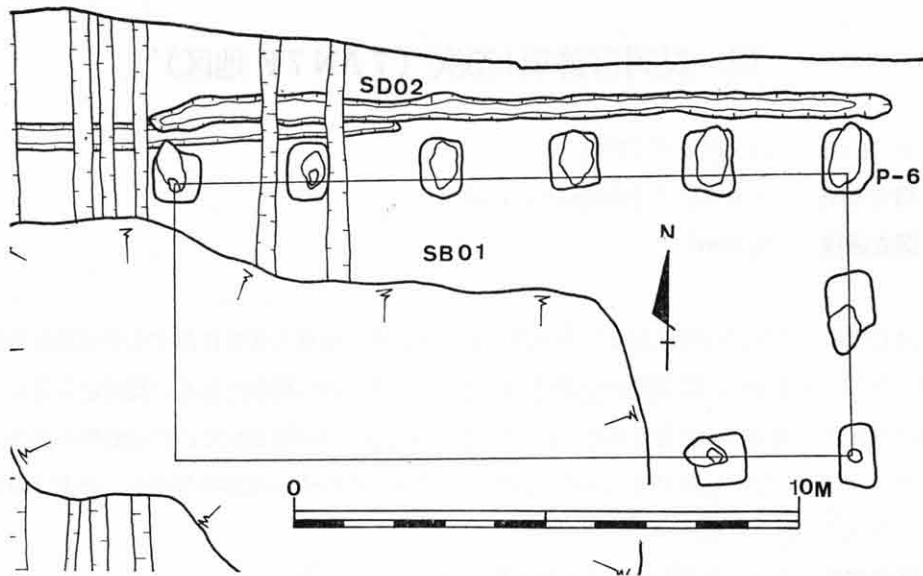
これらのうち(4)は長岡京時代の建物とその雨落溝で、重要な遺構と考えられるため、以下に詳しく紹介したい。

**建物 S B01** 東北地区で検出された東西棟5間×2間の掘立柱建物である。柱間寸法は梁行・桁行とも2.7m(9尺)等間である。



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

柱穴は主として南北に長軸をもつ方形を呈し、1.1m×0.8mの大きさで、深さ0.6mを測る。柱穴の埋土は、これを掘り込む際の整地層と地山との混合で、暗褐色を呈する粘性の強いものである。柱穴には柱を建物の外側に抜き取った痕跡が認められた。抜き取り穴は全般に黄褐色粘質土で埋め戻し、柱穴6から弥生時代の石斧が出土したことは興味深い。



第2図 平面実測図(部分)

**溝SD02** 建物SB01北面柱列から約1.5m外で検出された東西溝は、雨落溝である。長さ約14.2m、幅0.5~0.6m、深さ5~10cmを測る。平面形をみると、やや弧を描くが建物と平行に走り、妻の部分で両端が立ちあがる。溝の断面は皿状だが、凹凸が激しい。埋土は柱の抜き取り穴の黄褐色粘質土と酷似する。

**まとめ** 今回調査を実施した地点からは、長岡京期をはじめ各時代の遺構が検出された。以下、今回の知見と若干の問題点を次のようにまとめておきたい。

- ① 雨落溝の形態から建物の屋根は「切妻造り」と推定できる。
- ② 柱は計画的に抜き取られている。
- ③ 建物の規模(13.5m×5.4m)は大きいものではない。しかしながら、柱穴は比較的大きいものであることから、これを官衙とすれば重要な建物の一つであると理解でき、さらに付近に関連する建物が予想される。従って、今回の調査地北へ約60mの地点で検出された掘立柱<sup>(注)</sup>建物に注目し、位置関係等の検討が必要である。

- ④ 建物は、ほぼ真東西方向に向き、建物と朝堂院中軸との心々距離は104.5mである。これらのことから長岡宮造営プランにおいて、一貫性を見いだすことができる。

以上のように長岡京時代の問題を抽出してみたが、各時代の成果については今後詳しく検討していきたい。

(竹井 治雄)

注 「長岡宮跡Y地区発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1971)』) 京都府教育委員会 1971

### 13. 長岡宮跡第125次（7AN3B地区）

**所在地** 向日市森本町前田6-2  
**調査期間** 昭和57年7月29日～9月21日  
**調査面積** 160㎡

**はじめに** 今回の調査は、向日市森本町公民館建設工事に伴う事前調査である。調査地は、向日丘陵の段丘の東端裾部にあたり、西側には桂川の氾濫原である一帯が広がるが、現状では宅地化が進行している。同地周辺では昭和53年に7AN3A地区で向日市教育委員会による発掘調査が実施された。その際、北西から南東に流れる溝（SD8701）が検出され、長岡京期の土器・木簡・銅銭等が出土している。

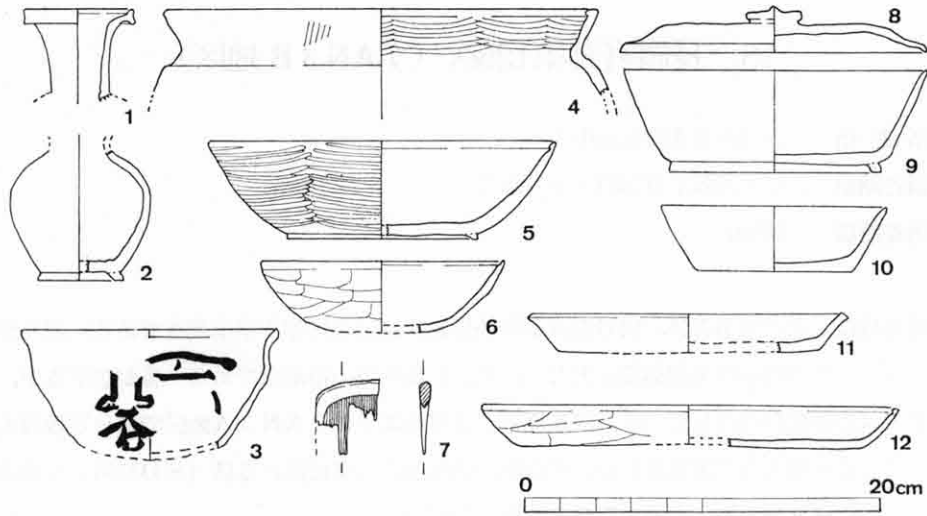
**調査概要** 今次の調査では、過去の調査を参考にしつつ、対象地の西側部分を取りあえず掘削し遺構の検出に努めた。その結果、旧耕作面から約65cm下において北西から南東に流れる溝（SD12501およびSD12502）を2本検出した。SD12501は、幅約4mで深さ20cm、灰褐色・褐色の砂礫層が埋土であった。SD12502は、幅約3.5mで深さ30cm、褐色の砂層が埋土である。いずれも黒褐色粘土層をベースにきりこんでおり、埋土中から長岡京期の遺物が多数出土した。また、SD12501では、溝岸にそって7本の杭を確認した。杭はいずれも面取りされており、長さ1m程度残存し黒褐色粘土層下の淡緑灰色粘土層まで打ち込まれていたことが認められた。同じ溝の底では、多数の足跡のような凹凸が検出された。

東部分の調査では、ほぼ真南北に流れる幅約1mの溝（SD12503）を検出した。出土遺物からして、やはり長岡京期と考えられる。

出土遺物は、大半が3本の溝中からで、土師器・須恵器のほかに、木片・木簡・銅銭・楠などがある。木簡1点と銅銭（『和同開珎』『萬年通寶』『神功開寶』）は、SD12501から出土した。墨書人面土器



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 出土遺物実測図

S D12501 ; 3・7・12 S D12502 ; 1・2・10 S D12503 ; 4・5・6・8・9・11  
 須恵器 ; 1・2・8~11 土師器 ; 3~6・12 櫛 ; 7

の破片も同じ溝から出土した。

今回の調査成果としては、南に隣接する地区で確認された S D8701 と今回の S D12501 が同一の溝であることが確認されること、S D12503 が東一坊大路の側溝である可能性がある<sup>(注2)</sup>、木簡が出土したことなどがあげられよう。

なお調査中において、向日市教育委員会の山中 章氏 より多くの御協力・御教示を頂いた。  
 (久保田 健士)

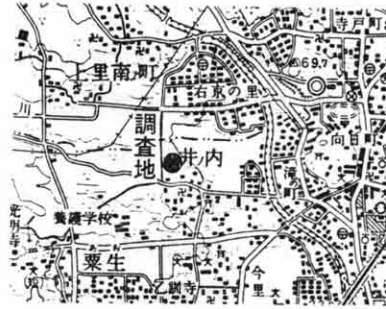
注1 山中 章「長岡宮第87次(7AN3A)地区」発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第5集 向日市教育委員会) 1979

注2 S D12503の国土座標は、Y=-26.308で朝堂院中軸(Y=-26.8403)から溝中心まで532.3mを測る。

## 14. 長岡京跡右京第107次（7 ANGNC 地区）

**所在地** 長岡京市井ノ内西ノ口  
**調査期間** 昭和57年7月19日～10月2日  
**調査面積** 約470㎡

**調査概要** 今回の調査は、乙訓福祉施設事務組合が授産施設「若竹園」を建設することに伴い、当該地が、長岡京跡の一画にあたるため実施したものである。調査地は、長岡京条坊復原図によれば、右京二条三坊に相当し、南一条大路と西三坊大路が交差する付近に推定される。また周辺には、縄文時代から中世に至る集落と考えられる井ノ内遺跡が広がる。



調査地位置図 (1/50,000)

調査の結果、古墳時代後期の土壌墓（2基）、中世のピット群、溝、土壌、石溜り等の遺構を検出した。遺物は、古墳時代から近現代に至るまでのものがある。以下それぞれの遺構の概略を記す。

土壌墓は、ともに後世の開発・削平を受け築造時の形状をとどめない。そのため規模、性格に関して不明な点が多いが、現存する長さは、それぞれ1.8m×0.4m、2.0m×0.3m（土壌下面）を測る。壙内からは、6世紀後半と思われる須恵器（杯身・杯蓋・短頸壺）、金環が出土した。なお1基では、土壌の端部で須恵器の杯蓋2個がふせた状態で検出された。枕に転用されていた可能性もある。

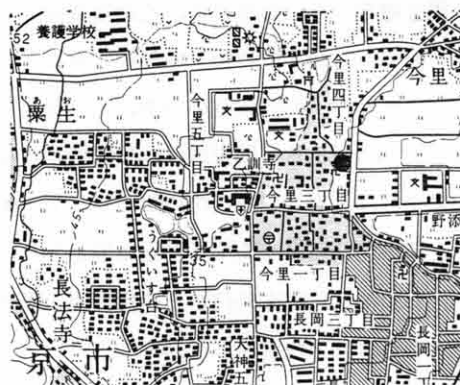
次に中世の遺構にふれたい。ピット群は、総数100を越え、ほとんど径0.2m程度の掘形をもつもので、柱穴等が考えられる。溝は、東西方向、南北方向、あるいは蛇行しながら走るものなど数本検出され、幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.3mの規模のものが多数を占める。土壌は、形状が方形あるいは楕円形を呈し、総数15を数える。石溜りは、上記の溝に平行し南北方向に走る。幅は1.0m程あり、長さ約16m分検出したが、なお調査地の北に続く。以上の遺構は、出土遺物（瓦器・中国製磁器・土師器等）、層位等から中世（鎌倉後期）に属するものと思われ、遺構としてのまとまりを欠き、判然としない点が多いが、中世集落の一画を構成するものであろう。

以上今回の調査で得られた資料は、長岡京遷都以前と廃都後のものが多数を占めるが、この時期の乙訓地域における歴史的な様相を伝える一資料と言えよう。（山下 正）

## 15. 長岡京跡右京第110次（7 ANIST-4 地区）

**所在地** 長岡京市今里4丁目  
**調査期間** 昭和57年8月4日～9月16日  
**調査面積** 約119㎡

はじめに 今回の調査は、京都府都市計画道路（外環状線）改良事業による道路の拡幅工事に際し、京都府乙訓土木工営所の依頼を受けて実施したものである。昭和52年以來の度々に亘る発掘調査により、この今里周辺地域は長岡京時代の遺跡を始め、多くの遺跡および遺物の存在が報告されている。わけても、長岡京の条坊復原作業はその中核を成すもので、これまで少しずつ明らかにされてきてい



調査地位置図 (1/25,000)

る。こうした事を背景にして、今回も発掘調査が必要とされたわけである。本調査地は、昭和54年度に調査された今里車塚古墳より南へ約40mの西側道路脇に位置し、長岡京条坊復原図によれば、東西の三条条間小路と南北の西二坊大路との交差点に当るものと理解されていた。以下にその概略を記したい。

**調査概要** 調査方法は、道路に沿って南北に細長いトレンチ（17×7 m）を設けて掘削した。平均深度は約 1.3mである。層位は、トレンチ東壁を例にとり上から順に列記すると、①盛土、②暗灰色粘土層（水田耕作土）、③灰褐色粘質土層（水田床土）、④明灰褐色粘土層、⑤黒褐色粘土層となる。次に遺構であるが、トレンチ北半部において三条条間小路の北側の側溝を辛うじて検出できた。第④層から切り込まれた深さ約20～30cm、長さ約5.5m、幅約1.5mのもので、埋土は主に黒味を帯びた灰色砂礫である。また、トレンチ南半部では、時期は不詳であるが自然流路と思われるものを検出した。最後に、出土遺物について簡単に述べておきたい。③層の床土中から若干の瓦器片、埴輪片等が混在して出土した他、側溝中から長岡京時代の須恵器甕・杯蓋（墨書のあるものを含む）・壺、土師器碗・高杯、土馬等が出土した。詳細は概報にて明らかにしたい。なお、三条条間小路の北側側溝は、既に道路をはさんだ東側でわずかながら確認されていた。それをさらに西に延長させて検出し得たことは、今回の主な成果であった。（黒坪 一樹）

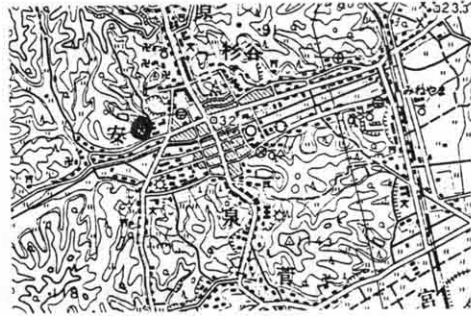
## 資料紹介

## 古殿遺跡出土の注口土器・案

戸原和人・藤原敏晃

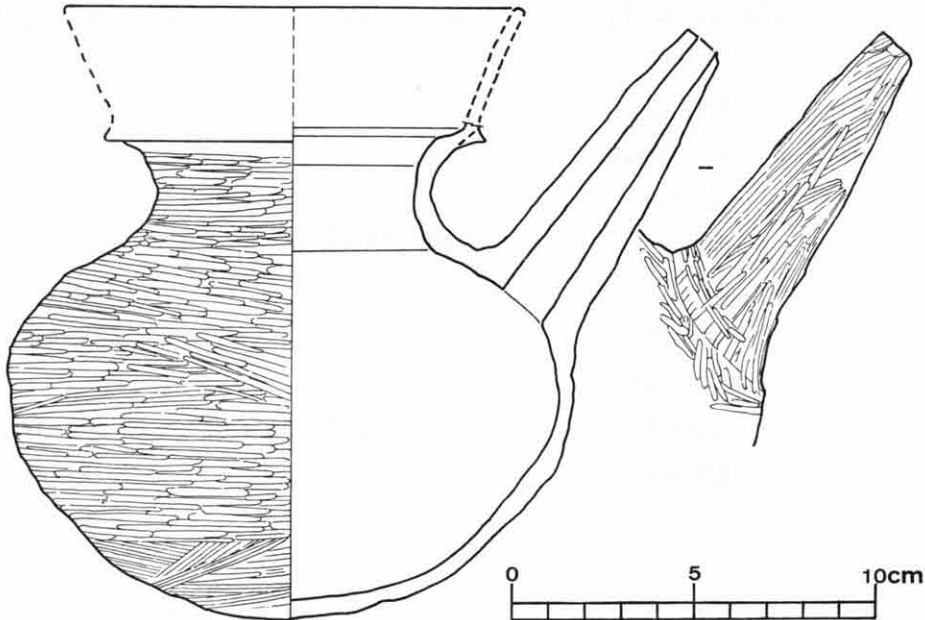
## 1. 注口土器

京都府中郡峰山町字安地区に所在する古殿遺跡は丹後地方でも有数の古墳時代前期集落跡である。昭和52・57年の2次の調査によって土器、木製品等数多くの地域歴史資料を得ることができた。その中で今回は京都で初めて出土した注口土器を紹介したい。



第1図 古殿遺跡位置図 (1/50,000)

出土した注口土器は口縁部の上部を欠くがほぼ完形で、残存高12cm、最大腹径15.3cmを測り、径1.2~3.2cm、長さ8cmの注口をもっている。器壁外面は全体を横方向にハケ調整をした後（注口部は縦方向にハケ目を施している）同方向にヘラミガキ（注口部は縦方向）



第2図 古殿遺跡出土注口土器



で仕上げている。内面は体部下半に横方向にヘラ削りが認められるが、体部上半部は観察不能である。口縁は欠損しているが二重口縁で、口縁端部は注口よりいくらか高くなるものと推察する。胎土は石英の細粒（1.5mm程度）を含み、焼成は堅緻である。色調は黄褐色を呈し、一部に丹塗りかと思われる朱色を観察する。

体部下半には煤が付着しており、その観察から数次にわたる使用を思わせる。この他1点注口のみが出土している。

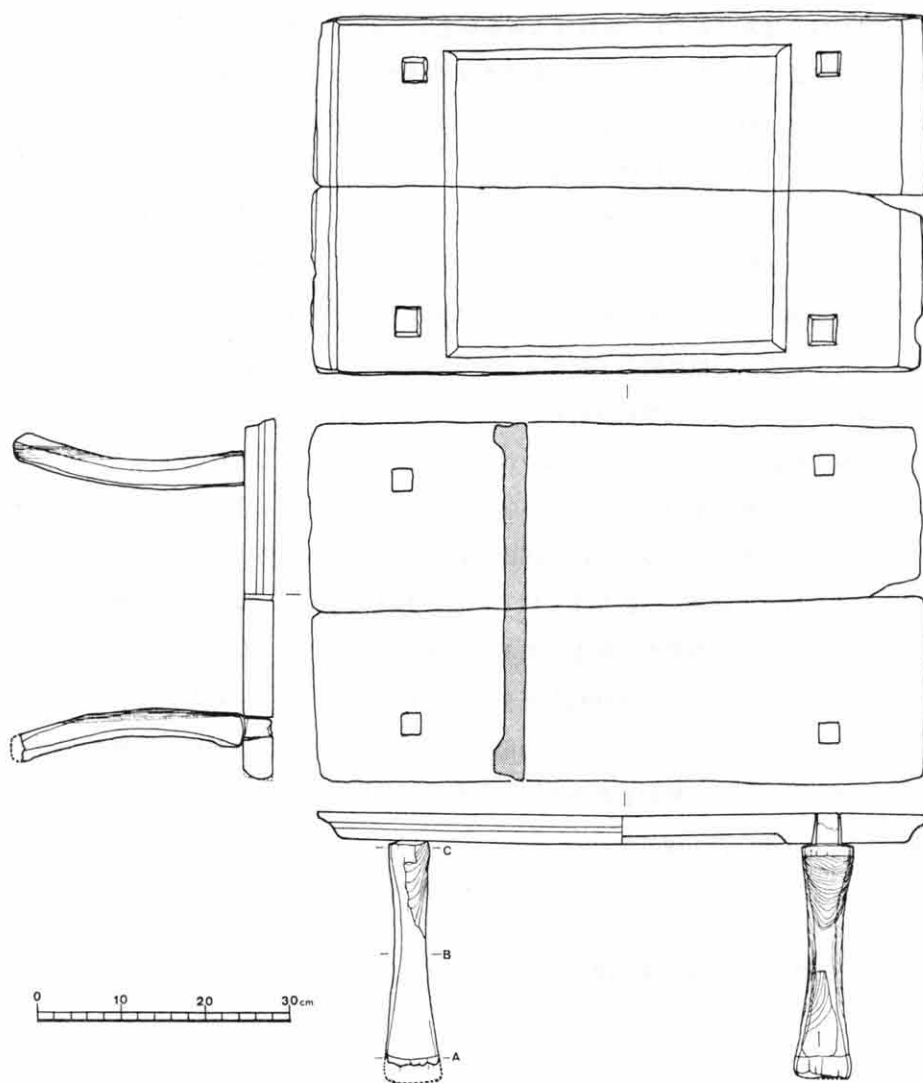
注口土器は一般に縄文時代後期の土器として知られるが、今回出土の古墳時代前期のものは山陰（特に鳥取県倉吉市では3遺跡で出土が確認されている）地方に多く、古墳時代の注口土器文化を考える上でも貴重な資料を得たといえる。

## 2. 案

前項紹介の古殿遺跡では弥生時代末から古墳時代前期にかけての多量の木製品が出土した。出土した木製品は土木建築用材（高床倉庫丸柱・矢板・角材・杭・組材等）、食膳具（桶・案・槽・盤・箱等）、機織具（糸車・紡錘車等）、農具（平鋤・長柄鋤）などで、出

	長径×短径×厚さ(cm)	出土遺構	備	考
甲 板	73×42×3.5	S D02	1枚作りの杉板、木口及び側面二段の装飾削り	
脚 1	長さ31.3	//		
	最大径6.8×厚さ3.2		先端部から2.5cmに段の削り出しをもつ	断面長楕円
	6.0×3.0			断面楕円
	6.0×3.7			断面隅丸長方
	ほぞ 2.7×2.5×高さ3.3			
脚 2	長さ29.6	//		
	6.2×3.0		先端部から1.9cmに稜をもつ	断面長楕円
	3.7×3.0			断面楕円
	4.8×3.9			断面隅丸楕方
	ほぞ 2.4×2.2×3.3			
脚 3	長さ30.8	//	先端部から2.0cmに段の削り出し	断面長楕円
	7.0×3.5			断面楕円
	3.8×3.3		上端より1cmに稜をもつ	断面隅丸長方
	5.3×4.2			
	ほぞ 2.6×2.6×3.5			

表1



第3図 古殿遺跡出土案

土量が少ないといわれている古墳時代の木製品を研究する上で、貴重な資料を数多く得ることができた。ここに紹介する資料は、昭和57年度調査における出土品の中でも特に注目された古墳時代前期の文机ともいえる案についてである。以下概略を報告して資料紹介をしたい。

今回出土した案は、上流の谷から古殿遺跡の集落内へ流れ出る旧流路の中で多量の土器・木器とともに発見されたもので、地下水が豊富であったことや河床という深さによって、よくその原状を今日に残っていた。

案は長辺73cm、短辺42cm、厚さ3.5cmの板と、最大径7.0cm、長さ31cmの蹄脚ともいえる

形状の脚部からなる(表1)。甲板はスギを材としており、木取りは板目取りの芯ヌキ材である。板面は木表を上にし、反りを防ぐためか木裏には41.2cm×36cm、深さ1cmの抉りをもつ。又側面は四面とも下面から上面へ向けての反りが施されている。脚との接合部にはホゾが掘られ、木表までぬけている。

脚は3本出土しており、それぞれの形状がわずかに異なる。全体としてAが長楕円形、Bが楕円形、Cが隅丸長方形を呈しており、約1/5cmの反りをもつ。

以上が古殿遺跡出土の案の概要であるが、甲板と脚を接合するホゾ穴が木表までつきぬけていることから、使用に際して机面上面をそのまま使用するとは考え難く、何らかの器具をこの上に載せたものと推察される。現在整理中の木製器具類の中に長辺の寸法が同程度の大型盤が確認されているが、あるいはそれを載せたものかもしれない。

国内における同種の案の出土や伝世品を確認していないが、正倉院伝世品の中には奈良時代の案があると聞いている。又、中国広州市郊外にある先烈路より発見された沙河漢墓<sup>(注1)</sup>出土の銅製案はその形状、寸法がよく似ている。案は①長辺74.0cm短辺45.9cm高さ15.0cmを測り古殿出土の案と規模が同程度である。②脚は直足と報告されているが、所謂円筒形でなく蹄脚状を呈している。③時代が建初年といわれ、時代差を考慮しなければならない。以上のことを考え合わせて、大まかに中国文化(漢式とでも言おうか)の影響をうけたデザインと考えられる。同様の資料があれば、是非御教授いただきたく、資料紹介を行った。詳細については報告書へ譲りたい。

(戸原 和人・藤原 敏晃=当センター調査課調査員)

注1 『文物』1961年 第2期 1961. 3

## 府下遺跡紹介

## 9. 千歳車塚古墳 &lt;図版4&gt;

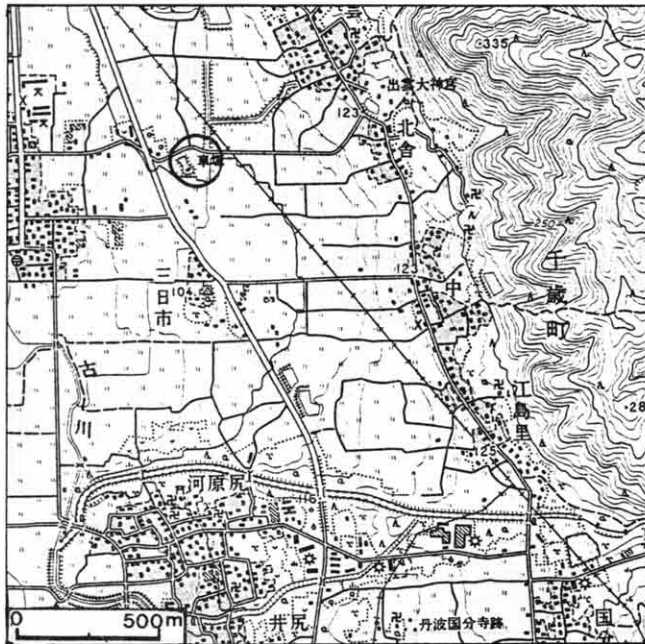
千歳車塚古墳は亀岡市千歳町千歳小字車塚に所在する。出雲神社が位置する御影山から西へ緩やかに下がる台地上にあり、前方部をわずかに北西方向に向けた前方後円墳である。(国鉄山陰線「千代川駅」下車、東へ約2.3km)

この古墳の東方には、延喜式内社で、大国主命、三穗津姫命を祭神とする出雲大神宮がある。草創は社伝によれば和銅2年(709)と言われ、『改暦雑事』には和銅4年(711)とある。社殿は貞和元年(1345)足利尊氏が建立し、鎌倉時代末期には丹波国一の宮と呼ばれていたらしい。本殿は重要文化財に指定されている。

本殿裏には出雲2号墳がある。直径11mの円墳で、無袖式の横穴式石室(現存部長5m)を有する。出土遺物は須恵器、土師器、鉄釘、木棺片、刀子で人骨3体分が確認されている。出土した須恵器に関しては「(前略)前方ニアリシ蓋附浅椀ノ類ハ蓋何レモ内被セシテ上ニ宝珠形ノ鈕アリ(後略)」の記述がある。(梅原末治「出雲村ノ古墳」京都府史蹟勝地調査会報告第6冊 1932)築造年代は須恵器の形態、石室の構造から7世紀代と考えら

れる。

出雲神社の約2km南には丹波国分寺跡がある。現在、塔の礎石17個と金堂の礎石2個が残っており、国の史跡に指定されている。国分寺は聖武天皇の詔勅によって国ごとに造営されたもので、現状から当時の大規模な寺院の面影を推測することができる。なお、最近太田遺跡、千代川遺跡等弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の発見も相次



第1図 千歳車塚古墳位置図

いでいる。

さて、千歳車塚古墳は全長79m、前方部基底幅45.5m、高さ6m、後円部基底直径41m、高さ7.5mの三段築成の前方後円墳で、くびれ部に方形の造出しがある。外部施設は現状では確認できないが、現在、亀岡市立図書館に展示されている円筒埴輪（第3・4図）が車塚古墳出土と伝えられていること、および前掲の文献中に、墳丘の所々に葺石を確認、後円部で赤焼土製品の小破片を採取したという記載事項があり、これらからも葺石と埴輪列の存在は確定できる。

この埴輪は、底径21cmの円筒埴輪で、外面は磨滅が著しく全面には確認できないが、タテハケで調整している。内面は粘土のつなぎ目が残ри、器底部には指頭圧痕が残る。突帯はかなり扁平で、川西宏幸氏の編年によれば第Ⅳ群に相当する。これは墳形からの本古墳築造年代（5世紀中）と矛盾しない。

この古墳の所在する亀岡盆地は、太田遺跡等に見るように、極めて肥沃な土壌であり、早くから生活に適した地域であった。このことが基盤となって古墳時代に入り、畿内との



第2図 千歳車塚古墳墳丘測量図

関連から、多くの古墳が築造されるようになった。ここでは、当地を上記のように理解し、次の3点を指摘したい。(1)出雲地方との関連 (2)大陸との関連 (3)集落形成により、古墳時代後期に至り、群集墳が成立したこと。

(1) 出雲地方で前期から後期に至るまでの、(特に安来平野では、造山1号墳、大成古墳、御立山古墳群、意宇河流域、宍道湖周辺ではカイツキ山古墳、丹華庵

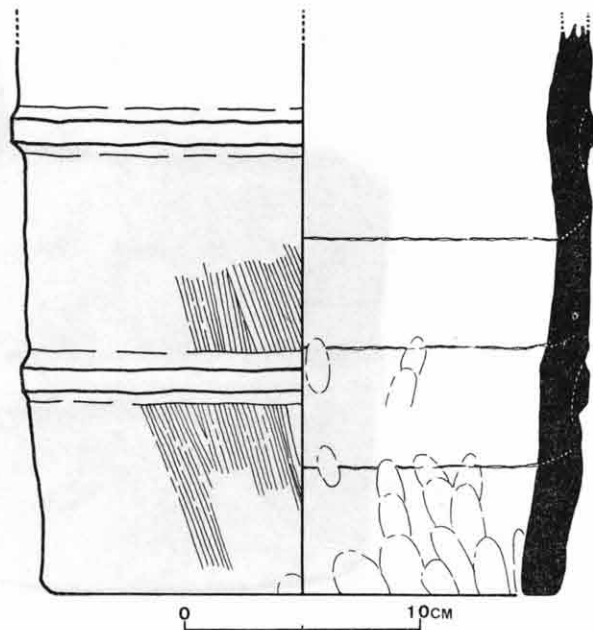
古墳、鶏塚古墳、山代古墳等) 方墳築造技術が、地理的には中国山地の北方、つまり海岸線より山陰道を経て移入され、その結果として、亀岡馬路の坊主塚古墳、同旭の天神塚古墳、同篠町の滝ノ花古墳、榎塚古墳が築造されたと言う見解。なお、出雲神社と古墳が築造された社会背景を忘れてはならない。

(2) 余部町の狐塚古墳は瓢箪形の古墳と言われているが、この墳形は大陸との関連で考えるのが妥当で、例えば、韓国・慶州の皇南洞第98号墳等、数多くある。また、拝田16号墳は石柵を有する古墳で、この技術も重要視すべきである。

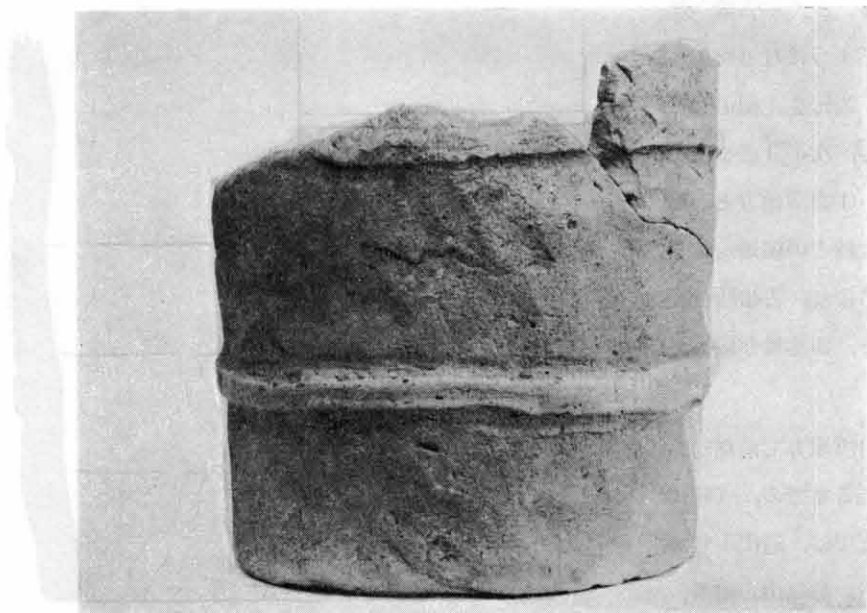
(3) 千歳町から北上し、池尻、観音寺を経て南下し、北金岐に至るまで、環状に群集墳が点在するが、これは明らかに後期になり、弥生時代、古墳時代前・中期にもまして、大規模に活動範囲を広げたことを物語っている。

上記3点は、非常に楽観的な見解であるが、一応の帰結として、従来の説を踏襲しつつここに再び記した。今一つ、農耕の移入により、従来からの水に対する観念は変質し、より一層神格化した可能性が考えられる。また、河川を軸として若干なりとも文化的様相の差異が生じた事は必然的であろう。とすれば、大堰川を境界線とした北東部と南西部においても、当然、そのような現象が推定ではあるが、考えられるのである。

以上、3つの観点から本古墳を見た場合、その何れに属するかは別にし、多種多様な解釈が可能である。しかし、盆地の平坦部に築造された前方後円墳であることは示唆的であ



第3図 千歳車塚古墳円筒輪実測図



第4図 千歳車塚古墳円筒埴輪

り、築造時の背景をある程度探り得るのではないだろうか。

本古墳の埴丘は、昭和45年3月に亀岡市史跡指定になった。過去において、里道拡張工事が計画され、周濠破壊の危険が生じたが、学問的価値が認められ、計画変更されたという、文化財保護の最良な具体例として、また、文化財保護の重要性を訴えた歴史がある。

昭和57年10月22日、文化財保護審議会は、亀岡盆地では、最も、残存状態の良い前方後円墳であり、古墳研究の上で非常に重要であることから、国の史跡として指定するように答申した。

五色塚古墳は、埴丘整備により築造時の壮大な姿を見る事が可能だが、本古墳は、少し違ったニュアンスで我々に古墳のイメージを彷彿とさせてくれる。

最後に、第2図は京都府教育委員会の提供を受けた。また、第3・4図は当調査研究センター調査員 岡崎研一氏から原図の提供を受け、亀岡市教育委員会の御配慮を得た。記して深謝する次第である。

(小池 寛)

#### 参考文献

- 『亀岡市史 上巻』亀岡市史編纂委員会 1960
- 『京都府南桑田郡誌』京都府教会南桑田郡部会（復刻 1972）
- 「千歳村車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊 京都府 1931
- 『古墳・埋蔵文化財』（財）京都府文化財保護基金 1972

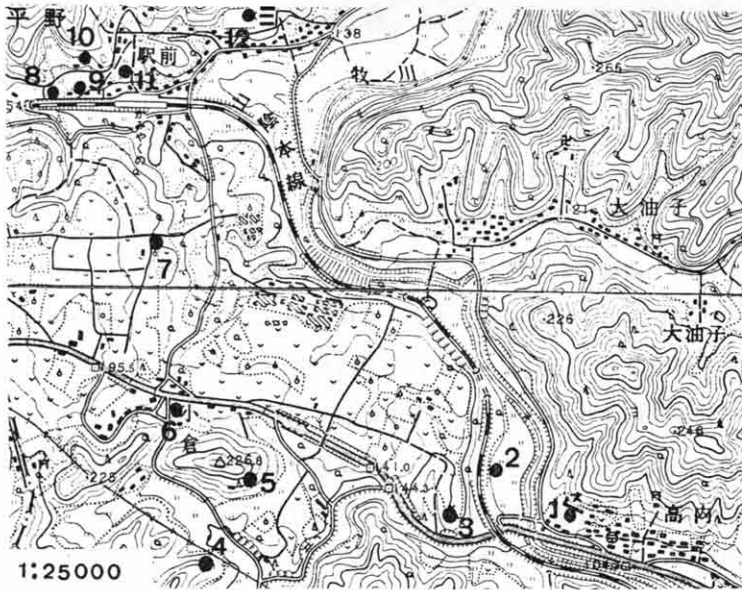
## 10. 長者森古墳

長者森古墳は京都府天田郡夜久野町高内に所在する。本古墳への交通機関は、国鉄「福知山駅」下車，京都交通バス「門垣，田谷，才谷行き」に乗り，「高内」で下車する。現在，本古墳は育英小学校々庭に築山として保存されている。

周辺には，上夜久野～国道9号線沿いに古墳群が点在し，また，本古墳の南方には須恵器窯跡(末の窯)がある。窯は大字高内から末に約40基が確認されている。操業期間は比較的短く，奈良時代後半から平安時代前半と考えられる。なお，供給先については検討を要する。その他，流尾古墳の須恵器は，当地域の石室出土の須恵器としては最古で，また，石室は所謂，竪穴系横口式と呼ばれる石室で貴重である。府下において同様の石室を持つ古墳は，加茂町草ヶ山古墳，宮津市の倉梯山1号墳，加悦町入谷西1号墳がある。伏見山，居母山，富岡山に点在するタタラ跡，鉄穴場は今後，末の窯と同様，研究課題を残している。

さて，長者森古墳は径23.6m，高4.7mの円墳で，葺石が確認されている。内部構造は玄室長5.5m，幅2.3m，高2.6m，羨道長6.7m，幅1.2m，高1.8mの両袖式の横穴式石室である。出土遺物は直刀，馬具，金環等の出土が伝えられているが真偽は不明である。内

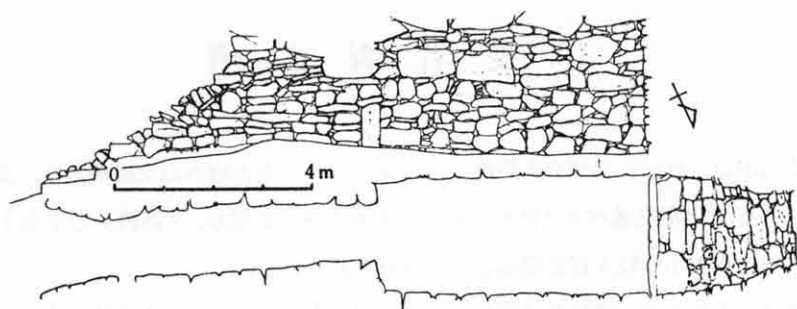
部構造の規模は上記の通りだが，特徴的なことは，天井部は1.3m前後の縦長の石材を横架し，奥壁は最下段が幅約70cm，高約60cmの石材で構築されその上に礫を積み上げる。側壁は天井下約1mに幅約1m，高約50cmの4石を並べており，この辺りから若



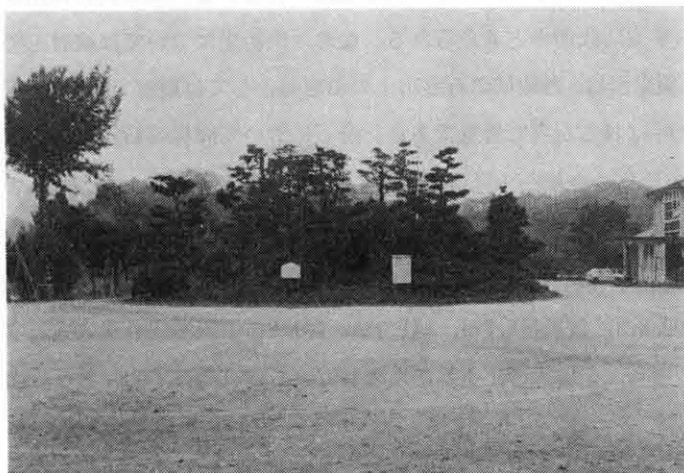
第1図 長者森古墳位置図及び周辺古墳分布図

- |          |            |          |          |
|----------|------------|----------|----------|
| 1. 長者森古墳 | 2. 藤原1号墳   | 3. 狼塚古墳  | 4. 宮ノ谷古墳 |
| 5. 聖山古墳  | 6. 塚田1号墳   | 7. 野小倉古墳 | 8. 塚脇古墳  |
| 9. 坪尻古墳  | 10. ゴリョウ古墳 | 11. 城越古墳 | 12. 流尾古墳 |





第2図 長者森古墳石室実測図



第3図 長者森古墳全景

干、持ち送りの度合を大きくしている。玄門部は左右に柱石を設置、その上部に左側は3石、右側は1石、同じ高さに積み、楣石<sup>まぐさいし</sup>を張渡しているが、天井面から一段低く設置されている。床構造は流入土の為、はっきり知り得ないが、闕石<sup>しきりいし</sup>の

可能性があろう。羨道部は主に板石を多用し、残存状態は良好である。

高水準の築造技術で構築された本古墳の当地域での位置づけは、検討を要するが、概して次のことが考えられよう。弥生時代の牧川周辺には平野白ヶ森遺跡、日置遺跡などの存在が確認されているが、出土遺物に銅剣形石剣があり、丹波3例、丹後2例、若狭1例の限定された分布を示す。また、出土土器にはタイプ、文様等から、中期以降からの畿内・山陽方面との接触を考えさせるものがある。これらが古墳築造の土台になっていることは間違いないであろう。築造年代は6世紀後半から7世紀前半が考えられる。

最後に、本古墳の場合、単に現状保存のみならず、学校教育の教材として利用されていることは、視聴覚教育に就いても有効であり、今後の文化財行政に就いても示唆的であると言えよう。伝出土遺物は、夜久野町郷土資料館に保管、展示されている。

(小池 寛)

### 参考文献

『京都 夜久野の文化財』夜久野町教育委員会 1981

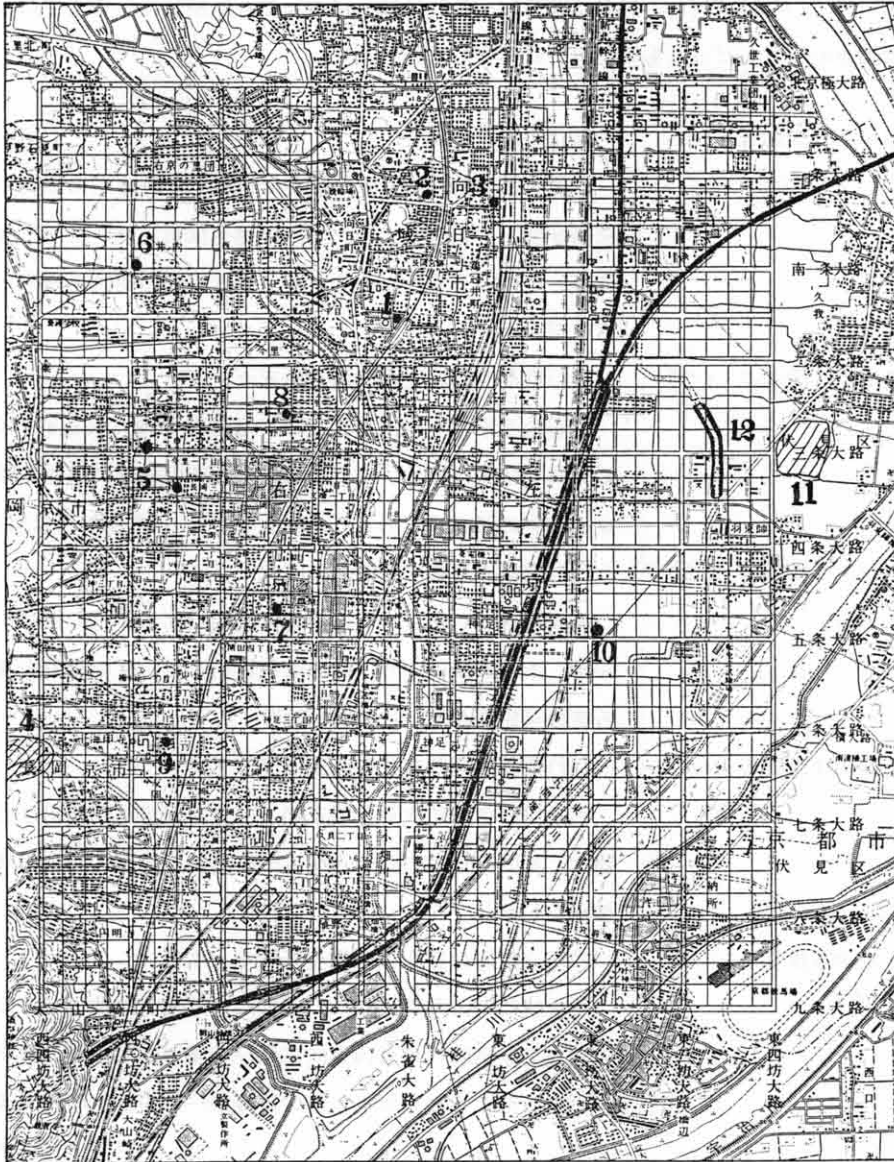
## 長岡京跡調査だより

長岡京連絡協議会は当センターの長岡整理事務所を会場として毎月行っているが、9月は22日に、10月は27日に、11月は26日に、12月は22日にそれぞれ開かれた。そこで報告された調査のうち主だったものを以下に紹介したい。

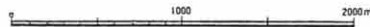
- |                 |  |
|-----------------|--|
| 宮内第 116 次調査 (1) | 向日市教育委員会<br>長岡宮朝堂院西第 4 堂の調査である。8 月までの調査で、東西 9 間と推定されていたが、東側へ拡張したところ、さらに東へ延びる可能性が強くなり、桁行 11 間の建物と推定されるに至った。   |
| 宮内第 123 次調査 (2) | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター<br>調査地北東部で検出されていた短辺約 80cm、長辺約 110cm の掘形を持つ柱列は、その後の拡張調査の結果、南北 2 間、東西 5 間の建物跡であることが判明した。(本誌 21 頁参照)  |
| 宮内第 125 次調査 (3) | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター<br>北西方向から南東方向に流れる長岡京期の流路の東で、幅 60cm、深さ 20cm の南北方向の溝を検出した。宮の東限を画する溝の可能性が高い。(23 頁参照)  |
| 右京第 104 次調査 (4) | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター<br>小泉川の古墳時代や長岡京期、中世の旧流路が検出された。特に、長岡京期の流路から多量の土馬及び墨書人面土器などが出土した。  |
| 右京第 105 次調査 (5) | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター<br>鎌倉時代頃の井戸、柱穴、土器だまりや溝の他に、その後の調査で奈良時代の東西方向に延びる溝や長岡京期の建物跡を検出した。また、舞塚古墳の周濠の一部や弥生時代の溝を確認した。舞塚古墳は、墳丘は早くに削平され、一帯は水田となっていたもので、京都府の行った下水道西幹線の立会調査や地名から、その存在が考えられていた古墳である。今回の調査で、帆立貝式の墳形を持つと推定されるに至った。 |
| 右京第 107 次調査 (6) | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  |

# 長岡京条坊復原図

平城京型復原による



1 : 30,000



数字は本文（ ）内と対応

- 中世の溝，柱穴，土壌の他に，古墳時代後期の土壌墓を2基検出した。土壌墓内からは，須恵器の杯や埴，金環などが出土した。(25頁参照)
- 右京第110次調査 (6) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
三条条間小路北側溝を検出した。幅80cm，深さ15cmを測る。溝内からは，長岡京期の土師器や須恵器にまじって，墨書された土師器皿などが出土した。(26頁参照)
- 右京第114次調査 (7) (財)長岡京市埋蔵文化財センター  
中世の建物跡や柱穴群，西小路川の旧流路や長岡京期の土壌等が検出された。
- 右京第117次調査 (8) (財)長岡京市埋蔵文化財センター  
弥生時代の溝や旧河道を検出した。
- 右京第118次調査 (9) (財)長岡京市埋蔵文化財センター  
鎌倉時代後半の柱穴群を多数確認している。
- 左京第87次調査 (10) (財)長岡京市埋蔵文化財センター  
東二坊大路の東西両側溝が検出された。
- 左京第91次調査 (11) (財)京都市埋蔵文化財研究所  
12～14世紀にかけての集落を検出した。掘立柱建物跡や溝とともに，木棺墓や土壌墓，火葬墓などが検出されている。
- 左京第92次調査 (12) (財)京都市埋蔵文化財研究所  
三条大路の南北両側溝や三条第二小路の南北両側溝を検出した。また，弥生時代の土壌や溝も検出されている。

(山口 博)

京都府埋蔵文化財情報 第5号 正誤表

ページ	行	誤	正
44	24	南一条大路	一条条間大路
45	8	10世紀	12世紀

## 教育委員会だより

### 久美浜町教育委員会

久美浜町教育委員会では、昭和57年7月13日から8月31日まで京都府教育委員会文化財保護課と京都府立丹後郷土資料館の協力を得て、第2次権現山遺跡の発掘調査を実施しました。

その結果、この古墳には1基の竪穴式石室を中心に総計7基の主体部と1基の壺棺が、1辺20m程の平坦面に整然と配置されていることが判明しました。

古墳の形態規模については、当初円墳と考えていましたが、測量や墳丘部分の試掘の結果から方墳の隅が突き出たいわゆる四隅突出型の古墳になる可能性が強まり、規模についても突出部を加えると一辺80m程の大古墳となるが、ただ突出部自体は、今回測量だけで終えているため、あくまでも可能性に留め、来年度に予定している第3次発掘調査に期待を寄せているところであります。

また、久美浜町では毎年11月の2・3日に文化祭を開催しておりますが、本年度はこの発掘調査にちなんで、「品田の文化財展と権現山遺跡」をテーマにして出土品等の展示会を福祉センターで開催しましたが、昨年の中銅装環頭大刀出現以来、町民の文化財に対する関心の高まりが感じられ、昨年を上回る多数の来場者があり盛況のうちに終了できました。

### 加悦町教育委員会

加悦町教育委員会では、昭和57年7月下旬から9月上旬にかけて、入谷西A-1号墳の発掘調査を行いました。古墳は調査前、崖に石室の石組を露出させており、大変危険な状態にありました。調査の結果、墳丘の規模などは確認することができませんでしたが、横穴式石室の一種である竪穴系横口式石室を検出することができました。石室は、地山を掘り凹めた墓壇内に花崗岩を積みあげて造られており、玄門部には石を積んだ階段が一段設けられた特異なものです。さらに羨道にあたる部分は床面が玄室より高く、石積みも乱雑で、その先には地山を掘りこんだ墓道が続いていました。埋葬は、6世紀前半に玄室主軸に平行に木棺を2棺安置しているようです。合計4回の埋葬が考えられます。遺物は玄室床面より検出しており、銅環、馬具、刀子、鉄鏃、土器92点などが出土しており、今その整理にあたっています。

これらの遺物及び遺構写真は、11月2・3日加悦町文化祭の一環として加悦町郷土史研

究会が展示を行い、約220名の町民の方々が見学に訪れました。今後は、遺物整理終了後、加悦町農村文化保存伝習センターで保管・展示を行い、一般の方々に広く公開したいと思います。

### 綾部市教育委員会

綾部市教育委員会では、昭和57年度に青野南遺跡・綾中廃寺跡・中山古墳の3か所の発掘調査を実施しました。

青野南遺跡は、6月上旬～10月下旬にかけて、原因者負担による都市計画道路予定地内の発掘調査と国庫補助による試掘調査を行いました。

道路予定地内の調査は、昭和56年度の調査において、郡衙跡と思われる掘立柱建物遺構を検出した西側部分の調査で、今回は、掘立柱建物の一部と思われる一辺1～1.3mの方形の柱穴を検出したほか、竪穴式住居跡5基・溝・土壙などを確認し、土壙の中からは完形の白磁碗が出土しました。

また、試掘調査は道路予定地の北側について実施したもので、大きな掘立柱の柱穴や郡衙の倉庫と考えることができる隅丸方形の柱穴を検出し、遺物は7世紀後半～8世紀頃の須恵器や土師器が多量に出土しました。

綾中廃寺跡については、綾中町堂ノ元花の木一帯から古瓦が出土することにより、古代寺院の存在が推定されているもので、昭和52・55年度の調査により、溝や瓦積みの遺構を検出し、多量の瓦が出土しています。

今回の調査は、綾中廃寺推定域の中央部南寄りを調査したもので、幅約70cm深さ約80cmの東西に走る溝を発見しました。

この溝の中には多量の瓦が埋没し、瓦は綾中廃寺創建瓦であるⅠ類が多く、修理瓦とされるⅡ類も見られ、溝の底部から瓦器片が出土することから平安時代の終わり頃まではこの溝が存続していたものと考えられます。

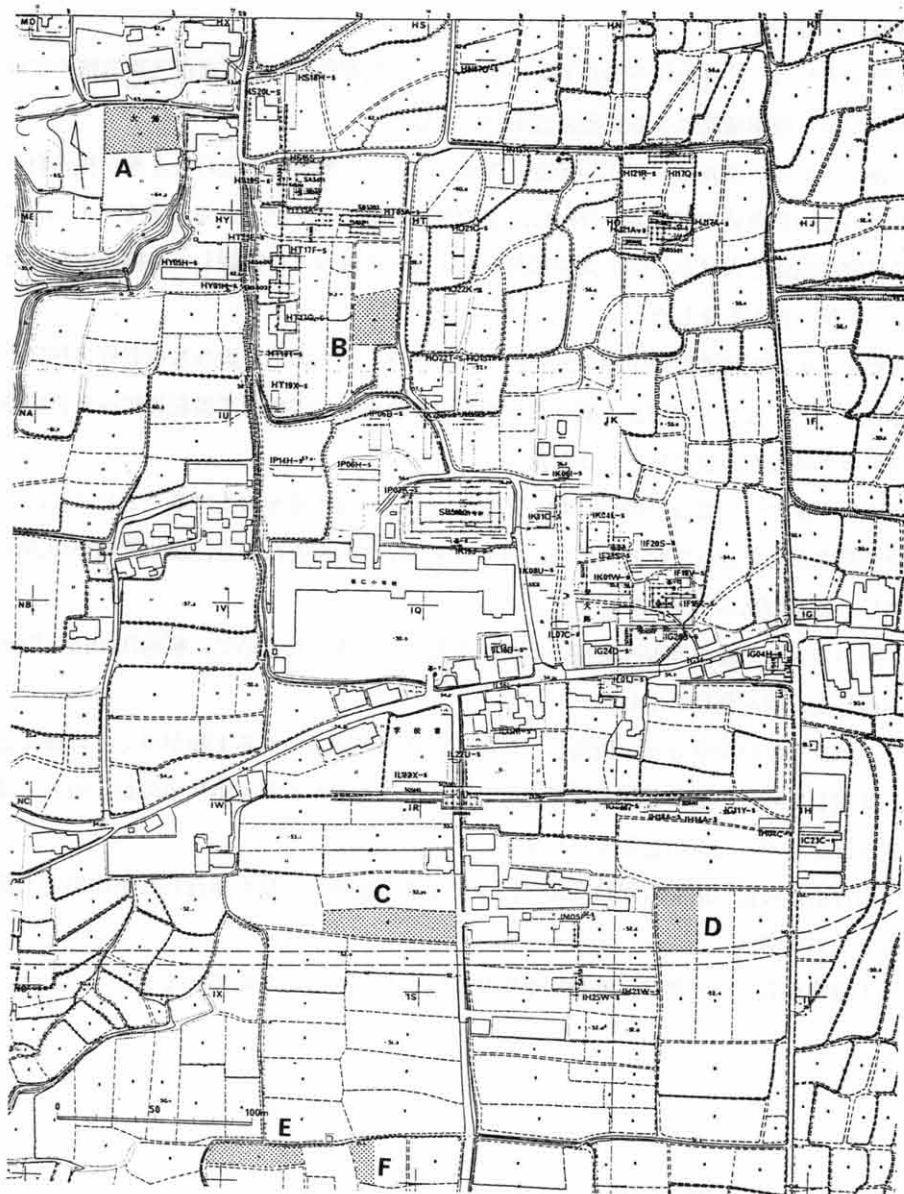
中山古墳は現在（昭和57年11月30日）調査中で、箱型の木棺を埋設した主体部と土器が出土しています。

出土遺物からこの古墳は、6世紀中頃に築造されたものと考えています。

京都府教育委員会

恭仁宮跡昭和57年度発掘調査予定

京都府教育委員会では開発に先立って遺跡の概要を把握し、遺跡の保存を計画する資料とする目的で、昭和48年度から恭仁宮跡の発掘調査を継続して実施してきました。その結果、これまで文献資料の上から、また歴史地理学によって研究が進められていた恭仁宮跡



恭仁宮跡昭和57年度調査予定図

の具体的な姿が遺構、遺物によって次第に明らかとなってきました。すでにこの京都府埋蔵文化財情報創刊号で紹介されたとおり、恭仁小学校北側の土壇において、山城国分寺金堂跡が恭仁宮大極殿跡であることを確定したのを始めとして、大極殿院や推定内裏域そして官衙域において、回廊部分足場杭や柵(塀)跡及び建物跡、そして官衙正殿跡等を確認することができました。また山城国分寺についても南大門、築地などの遺構によって寺域を明らかにしたほか、塔院跡や工房跡を検出しました。

以上のような成果を踏まえて昭和57年度は恭仁宮跡調査開始後10年目に当る発掘調査を昭和57年10月12日から実施しています。昭和57年度の調査は宅地造成等の事前調査地3か所を含めて8か所を予定して実施中です(調査予定図参照)。

本年度はこれまで解明の遅れていた朝堂院域および足利健亮氏の説による宮城南限付近の究明を、幸い地元の方々の協力をいただくことができた為に、主要目標として掲げて調査を開始することができました。朝堂院域では、東第3堂の位置に中心軸線から東へ約200尺の位置に南北方向に続く柵(塀)跡を検出しているのみであるので、同様の柵跡が区画的に巡らされているか否か、朝堂や築地の痕跡が残っているかどうか、大いに期待をもって調査を進めています。また昨年度、東へ曲ることが判明した内裏関係柵跡の東側の延長部分の調査(予定図B)もあわせて予定しています。

### 山城郷土資料館オープン

かねてより開館準備を進めてまいりました京都府立山城郷土資料館が、昭和57年11月3日よりオープンし、開館展示の運びとなりました。これにより、京都北部の丹後郷土資料館に次いで南部の資料館が完成したことになり、京都府下の南北両地域において、文化活動の拠点ができただけです。

開館記念展示としては、「南山城の歴史と文化」と題し、南山城地方の歴史と文化を考古・歴史・民俗・美術の各分野から、体系的に展示・公開しています。南山城地方は、木津川・宇治川流域の沖積地とそれを取り巻く丘陵山地を中心にして、数多くの文化財が今日に伝えられています。今回の展示においては、これらを先史時代から鎌倉時代までに分け、各時代ごとにテーマを設定して、この地方の文化的特色をより一層、明らかなものにしようとしています。今回の記念展示は、12月上旬までになっていますが、その後も展示品を一部入替え、このテーマで展示を続けます。また、室町時代以降についても、今後、充実を図って行きたいと考えています。

なお、展示のほかに、当資料館の業務としては本体にあたる、資料の収集・整理及び保存に関することや、資料の調査・研究に関することなどがあります。中でも当館の1つの



● 資料館の周辺地図

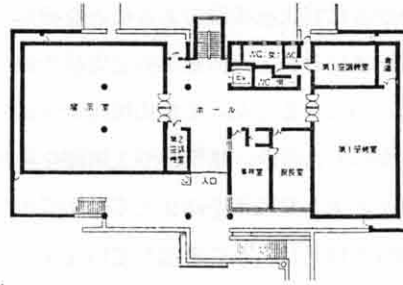


● 交通

- 国鉄奈良線上粕駅下車徒歩20分
- 京阪・近鉄バス「泉大橋」下車徒歩20分
- 近鉄京都線山田川駅下車タクシー12分

● 資料館案内

2階平面図



- 開館時間 午前9:00～午後4:30
- 展示室休館日 毎週月曜日・年末年始(12月28日～1月4日)
- 入館料 一般 100円 児童・生徒 30円(団体割引 20人以上)
- 所在地 相楽郡山城町大字上粕小字千両岩(〒619-02) TEL(077486) 5199
- 施設 R/C造3階建・延床面積 2,970㎡  
展示面積 300㎡

特徴として、遺物の保存処理に関する施設があり、これについても、現在、その機能を果たせるよう準備を進めているところです。今後とも、文化財関係者はもちろん、ひろく府民の方々に御利用頂くよう御案内致します。

## センターの動向(9～11月)

1. できごと
9. 2 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始～10.4
9. 3～4 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック協議一於和歌山市一出席(栗栖事務局長, 白塚総務課長)
- 9.11 古殿遺跡(峰山町)現地説明会実施 約120名参加
- 9.14 長岡宮跡第123次(向日市), 長岡京跡右京第105次(長岡京市), 同右京第110次(長岡京市)発掘調査関係者説明会実施
- 9.18 大内城跡古墓(福知山市)関係者説明会実施
- 9.20 長岡宮跡第123次(向日市, 保健センター建設予定地)発掘調査終了7.12～, 長岡宮跡第125次(向日市, 森本公民館建設予定地)発掘調査終了7.30～, 長岡京跡右京第110次(長岡京市, 外環状線建設予定地)発掘調査終了8.4～
- 9.22 長岡京跡連絡協議会開催
- 9.28～29 第3回全国埋蔵文化財法人連絡協議会研究会一於盛岡市一出席(白塚総務課長, 安田会計主任, 堤調査課長, 辻本, 水谷主任調査員)
- 9.30 長岡京跡右京第107次(長岡京市)関係者説明会実施, 木津川河床遺跡(八幡市)関係者説明会実施
10. 1 中世墳墓研究会一於当調査研究センター一開催, 講師高槻市埋蔵文化財調査センター森田克行, 橋本久和両氏調査課職員出席
10. 2 長岡京跡右京第107次(長岡京市, 授産施設建設予定地)発掘調査終了7.19～
10. 4 馬原古墳他(精華町), 深草遺跡(京都市伏見区), 医王谷古墳(亀岡市)発掘調査開始
- 10.14 青野遺跡(綾部市)関係者説明会実施
- 10.18 亀山城跡(亀岡市)発掘調査開始～11.2
- 10.22 篠・石原畑窯跡(亀岡市)現地説明会実施 約70名参加
- 10.23 太田遺跡(亀岡市)現地説明会実施 約60名参加
- 10.27 長岡京跡連絡協議会開催
- 10.29 深草遺跡(京都市伏見区)関係者説明会実施
- 10.31 深草遺跡(京都市伏見区)発掘調査終了10.4～
- 11.19 大内城跡古墓(福知山市)保存に関する関係者打合せ会
- 11.26 長岡京跡連絡協議会開催
- 11.29 後正寺古墓, 小屋ヶ谷古墳, 洞楽寺古墳(福知山市)現地説明会実施 約60名参加
2. 普及啓発事業
- 9.15 第6回調査成果交流会一於長岡京市

- 図書館一報告 長谷川 達「狐谷横穴群の発掘調査」石井清司「篠・西長尾窯跡群の発掘調査」
- 9.30 『京都府埋蔵文化財情報』第5号刊行
10. 2 高槻市史談会一於高槻市市民会館一講演 伊野近富「大内城跡の発掘調査」
- 10.17 第10回研修会一於亀岡市立図書館一開催(発表者及び題名)永光 尚「亀山城築城と城下町の成立」村尾政人「亀岡盆地の弥生時代遺跡」現地見学 参加者56名
11. 3 亀岡の歴史資料展文化財講演会一於亀岡市立図書館一講演 水谷寿克「篠古窯跡群の発掘調査の概要」
11. 7 亀岡の歴史資料展現地見学会一西長尾5・6号窯発掘調査現場 講師 引原茂治
- 11.27 第11回研修会一於京都社会福祉会館一開催(発表者及び題名)石井清司「亀岡市篠・石原畑窯跡の発掘調査」戸原和人「峰山町古殿遺跡の発掘調査」杉本 宏「宇治市隼上り瓦窯跡の発掘調査」参加者65名
- 11.28 スライドでみる乙訓の発掘一於向日市中央公民館一報告 山口 博「長岡京跡右京第83次調査」

府下報告書等刊行状況一覧 (56.11～57.12月)

発掘調査報告書関係

- 『柿本遺跡 付権現山遺跡』(久美浜町文化財調査報告 第5集) 久美浜町教育委員会 1982.2
- 『湯舟坂2号墳一発掘調査の記録一』(同 第6集) 久美浜町教育委員会 1982.3
- 『いもじや古墳・奈具岡遺跡発掘調査報告書』(弥栄町文化財調査報告 第3集) 弥栄町教育委員会 1982.3
- 『中野遺跡第3次発掘調査概要』(宮津市文化財調査報告 5) 宮津市教育委員会 1982.3
- 『芦ノヤ・河ノ辺遺跡』(加悦町文化財調査概要 1) 加悦町教育委員会 1982.3
- 『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会 1982.3
- 『周山瓦窯跡発掘調査報告書』京北町教育委員会 1982.3
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 向日市教育委員会 1982.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 長岡京市教育委員会 1982.3
- 『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書』(長岡京市文化財調査報告書 第10冊) 長岡京市教育委員会 1982.3
- 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第2集 大山崎町教育委員会 1982.3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第11集 城陽市教育委員会 1982.3
- 『相楽山銅鐸出土地・大畠遺跡一発掘調査の記録一』 木津町教育委員会 1982.11
- 『平安京跡発掘調査概報』(昭和56年度)京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982.3
- 『鳥羽離宮跡調査概要』(昭和56年度) 同上 1982.3
- 『中臣遺跡発掘調査概要』(昭和56年度) 同上 1982.3
- 『中久世遺跡発掘調査概報』(昭和56年度) 同上 1982.3
- 『北白川廃寺跡発掘調査概要』(昭和56年度) 同上 1982.3
- 『京都市内遺跡試掘, 立会調査概報』(昭和56年度) 同上 1982.3
- 『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982.3
- 『平安京左京八条三坊』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第6冊) 同上 1982.5
- 『埋蔵文化財発掘調査概報 (1982)』京都府教育委員会 1982.3

**当調査研究センター現地説明会・中間報告資料**

**現地説明会**

- 「篠窯跡群・西長尾窯跡Ⅱ」(京埋セ現地説明会資料 No.81-07) 1981.12.24  
「前柵2号墳」(同 No.82-01) 1982.1.30  
「大内城跡・宮遺跡」(同 No.82-02) 1982.2.20  
「長岡京跡右京第83次」(同 No.82-03) 1982.3.12  
「古殿遺跡」(同 No.82-04) 1982.9.11  
「篠・石原畑窯跡」(同 No.82-05) 1982.10.22  
「太田遺跡」(同 No.82-06) 1982.10.23  
「後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳, 洞楽寺古墳」(同 No.82-07) 1982.11.29  
「医王谷3号墳」(同 No.82-08) 1982.12.17

**中間報告**

- 「長岡京跡右京第83次」(京埋セ発掘調査中間報告 No.81-08) 1981.12.22  
「宮ノ平」(京埋セ中間報告資料 No.82-01) 1982.3.25  
「豊富谷丘陵遺跡」(同 No.82-02) 1982.3.26  
「狐谷横穴群」(同 No.82-03) 1982.3.29  
「長岡宮跡第119次」(同 No.82-04) 1982.6.11  
「長岡京跡右京第105次」(同 No.82-05) 1982.9.14  
「長岡京跡右京第110次」(同 No.82-06) 1982.9.14  
「長岡宮跡第123次」(同 No.82-07) 1982.9.14  
「大内城跡中世墳墓・後正寺古墓」(同 No.82-08) 1982.9.18  
「青野遺跡」(同 No.82-09) 1982.10.14  
「深草遺跡」(同 No.82-10) 1982.10.29  
「亀山城跡」(同 No.82-11) 1982.11.2  
「長岡京跡右京第105次」(同 No.82-12) 1982.12.8

**府下現地説明会資料**

- 「権現山遺跡第二次発掘調査」久美浜町教育委員会 1982.8.31  
「竹野遺跡」丹後町教育委員会 1982.11.20  
「七尾・扇谷遺跡」峰山町教育委員会 1981.11.25  
「扇谷遺跡発掘調査」峰山町教育委員会 1982.9.11

- 「日置地区ほ場整備に伴う試掘調査」宮津市教育委員会 1982. 5. 8
- 「中野遺跡第4次発掘調査」宮津市教育委員会 1982. 8. 10
- 「芦ノヤ・河ノ辺遺跡発掘調査」加悦町教育委員会 1981. 11. 28
- 「入谷西A-1号墳発掘調査」加悦町教育委員会 1982. 8. 21
- 「田辺城（田辺城遺構第2次発掘調査）」舞鶴市教育委員会 1982. 7. 11
- 「志高遺跡II」舞鶴市教育委員会 1982. 11. 8
- 「青野南遺跡・綾中廃寺跡」綾部市教育委員会 1982. 10. 9
- 「中山古墳発掘調査」綾部市教育委員会 1982. 12. 4
- 「和久寺廃寺跡」福知山市教育委員会 1982. 11. 27
- 「愛宕山古墳発掘調査」京北町教育委員会 1982. 9. 11
- 「史跡丹波国分寺跡第一次発掘調査」亀岡市教育委員会 1982. 12. 18
- 「長岡京跡右京90次(7ANKTN地区)」長岡京市教育委員会 1982. 1. 28
- 「長岡京跡右京第96次(7ANKUT-4)調査」長岡京市教育委員会 1982. 6. 26
- 「長岡京市南原古墳」長岡京市教育委員会 1982. 8. 7
- 「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)・鶏冠井遺跡第2次発掘調査」向日市教育委員会  
1982. 3. 14
- 「長岡宮跡第116次(7AN15H地区)」向日市教育委員会 1982. 7. 17
- 「隼上り瓦窯跡」宇治市教育委員会 1982. 3. 20
- 「隼上り瓦窯跡」宇治市教育委員会 1982. 7. 17
- 「昭和57年度大鳳寺跡発掘調査」宇治市教育委員会 1982. 9. 11
- 「羽戸山遺跡発掘調査」宇治市教育委員会 1982. 12. 18
- 「口駒ヶ谷遺跡」田辺町教育委員会 1982. 10. 31
- 「相楽山銅鐸出土地発掘調査」木津町教育委員会 1982. 8. 7
- 「大島遺跡発掘調査」木津町教育委員会 1982. 10. 16
- 「昭和56年度恭仁宮跡発掘調査概要」京都府教育委員会 1982. 1. 30
- 「武道関連施設建設に伴う白河街区跡発掘調査」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982. 9. 4
- 「伏見城跡発掘調査」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982. 12. 18
- 「鳥羽離宮跡第75次調査」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982. 6. 5
- 「鳥羽離宮跡第79次調査」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982. 11. 20
- 「三井ビル新築敷地発掘調査」平安博物館 1982. 8. 28
- 「京都大学教養部構内の遺跡(AP22区)」京都大学構内遺跡調査会・京都大学埋蔵文化財  
研究センター 1982. 3. 23

「白河北殿北辺第3次調査(A F15区)」 同 上 1982.8.27

「相国寺靈宝殿地点の発掘調査」同志社大学校地学術調査委員会 1982.3.9

**その他の雑誌, 報告, 論文等**

『京都府埋蔵文化財情報』第2号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1981.12

『京都府埋蔵文化財情報』第3号 同 上 1982.3

『京都府埋蔵文化財情報』第4号 同 上 1982.6

『京都府埋蔵文化財情報』第5号 同 上 1982.9

『考古展 第1回小さな展覧会』 同 上 1982.7

『丹後郷土資料館報』第3号 京都府立丹後郷土資料館 1982.3

『峰山桃谷古墳』(特別陳列図録11) 同 上 1982.7

『展示図録 南山城の歴史と文化』京都府立山城郷土資料館 1982.11

「入谷西A-1号墳展」(第23回加悦町郷土史展) 加悦町郷土史研究会 1982.11

「蛭子山古墳・作り山古墳」(加悦町文化財シリーズ1) 加悦町教育委員会 1982.7

『福知山市の指定文化財』福知山市教育委員会 1982

『亀岡の歴史資料展』亀岡市教育委員会・亀岡市文化財保護委員会 1982.11

『わが町の弥生時代』('82文化財展) 向日市教育委員会 1982.11

「長岡京時代の都びとの生活」(第21回市民文化まつり文化財展) 長岡京市教育委員会・  
(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1982.11

『長岡京市遺跡地図』長岡京市教育委員会 1982.3

『京都考古』第26号・第27号 京都考古刊行会 1982.5・8

『太邇波考古』創刊号・第2号 両丹技師の会 1982.5・12

『長岡京』第23号・第24号 長岡京跡発掘調査研究所 1981.12・1982.6

『福知山市史』第二巻 福知山市史編さん委員会 1982.3

『井手町の古代・中世・近世』(井手町史シリーズ 第4集) 井手町史編集委員会 1982.3

堤 圭三郎「亀岡市篠窯跡群」『丹波史談』第112号 口丹波史談会 1982.3

樋口隆久「御上人林麿寺発掘調査概要」『丹波史談』第112号 口丹波史談会 1982.3

定森秀夫「三条西殿跡出土の巡礼札」『古代文化』33-12 1981.12

田中彩太「特殊円筒棺の諸問題—京都府与謝郡谷垣遺跡をめぐって—」『古代文化』34-7  
1982.7

石田志朗「京都盆地北部の扇状地—平安京遷都時の京都の地勢—」『古代文化』34-12  
1982.12

杉本 宏「豊浦寺瓦窯の発見—京都府宇治市隼上り瓦窯跡—」『古代文化』34-12 1982.12

受贈図書一覧(9~11月)

(財)北海道埋蔵文化財センター	東山5遺跡, 吉井の沢の遺跡, 美沢川流域の遺跡群V, 美沢川流域の遺跡群発掘調査の概要
(財)岩手県埋蔵文化財センター	岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第28集~第30集, 同 第32集~第44集, 紀要II
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	清里・陣場遺跡
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第5集~第16集
(財)千葉県文化財センター	千葉県文化財センター年報 No6, 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VII, 千葉県中近世城跡研究調査報告書 第2集, 千葉県我孫子市日秀遺跡遺構確認調査概報, 茂原市山崎横穴群, 千葉市矢作貝塚, 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書I, 千葉東南部ニュータウン10, 同11, 成東町真行寺廃寺跡確認調査報告, 市原市番後台遺跡・神明台遺跡, 市原市養老藤原式揚水車1・2号機, 成田市三里塚馬場遺跡, 千葉県文化財センター研究紀要7
(財)東京都埋蔵文化財センター 小平市遺跡調査会	多摩ニュータウン遺跡(昭和56年度)第1分冊~第4分冊 鈴木遺跡
(財)滋賀県文化財保護協会	滋賀県文化財目録(昭和57年度追録), 水口岡山城跡試掘調査報告書, 国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書, 北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書VIII, 大篠原東古窯跡試掘調査報告書
(財)大阪文化財センター	巨摩・瓜生堂, シンポジウム邪馬台国の謎を解く
(財)大阪市文化財協会	瓜破北遺跡II, 大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告II
(財)枚方市文化財研究調査会	枚方市文化財年報III
高槻市立埋蔵文化財調査センター	嶋上郡銜跡他関連遺跡発掘調査概要・6
奈良国立文化財研究所	条里制の諸問題I, 平城宮発掘調査報告XI, 法隆寺発掘調査概報I
(財)元興寺文化財研究所	高野山発掘調査報告書
(財)鳥取県教育文化財団	長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV(埴輪編)
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	渡瀬遺跡, 西山・小和田・永宗, 平木池遺跡発掘調査報告, 地宗寺遺跡発掘調査報告, 長迫遺跡発掘調査報告, 埋蔵文化財調査に関する安全基準
草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒木簡一, 草戸千軒調査研究ニュース 第9巻, 草戸千軒町遺跡第28・29次発掘調査概要
札幌市教育委員会 文化庁	札幌市文化財調査報告書XXIII~XXV 遺跡確認法の調査研究昭和55年度実施報告, 広域遺跡保存対策調査研究報告4
東京都教育委員会	堺遺跡
神奈川県教育委員会	細田遺跡
愛東町教育委員会	上田遺跡発掘調査報告書
八尾市教育委員会	八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要, 宮町遺跡発掘調査概要I, 昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報
岩手町教育委員会	岡田遺跡発掘調査概報III



福岡県教育委員会  
鹿児島県教育委員会

日立市郷土博物館  
市川市立市川博物館  
芝山はにわ博物館  
東京都目黒区守屋教育会館郷土資料室  
青梅市郷土博物館

出光美術館  
大田区立郷土博物館  
小松市立博物館  
福井県立朝倉氏遺跡資料館  
名古屋市見晴台考古資料館  
滋賀県立近江風土記の丘資料館  
堺市博物館  
(財)有年考古館  
(財)辰馬考古資料館  
天理大学附属天理参考館  
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館

和歌山県立紀伊風土記の丘資料館  
島根県立八雲立つ風土記の丘資料館  
瀬戸内海歴史民俗資料館  
九州歴史資料館

熊本市立熊本博物館

東北大学文学部考古学研究室  
日本大学史学会  
國學院大學考古学資料室  
駒沢大学考古学研究室

立正大学文学部考古学研究室  
神戸女子大学史学会  
熊本大学文学部考古学研究室

日本庭園文化協会  
大阪郵政考古学会  
貿易陶磁研究会

三雲遺跡Ⅱ, 午頸中通遺跡群  
九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ～Ⅻ,  
大隅地区埋蔵文化財分布調査概報

日立市郷土博物館年報 第2号, 同 第3号  
昭和56年度市立市川博物館年報  
千葉県印旛郡栄町小台遺跡発掘調査報告書  
中目黒遺跡

崩橋遺跡・霞台遺跡群昭和55年度調査概報,  
霞台遺跡群・大附遺跡他昭和56年度調査概報  
出光美術館 館報第32号, 同 第34号～第39号  
特別展 くらしとあかり  
白山信仰と一向一揆展  
特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅻ, 豊原寺跡Ⅱ, 同Ⅲ  
見晴台教室'81  
出土品にみる江戸時代の生活  
巨大古墳とその周辺, 堺市博物館報Ⅰ  
相生市入野窯跡発掘調査報告書  
辰馬考古資料館考古学研究紀要1  
天理参考館50周年を迎えて, 変貌の道具 仮面  
高松塚拾年

特別展 中世のやきもの

特別展 島根の古代

瀬戸内海歴史民俗資料館年報 第7号  
九州歴史資料館年報 昭和48年度～50年度, 同 52年度, 同 55年度,  
九州歴史資料館研究論集3, 同6, 大宰府の文化財,  
九州歴史資料館収蔵資料目録1, 田中幸夫寄贈品目録  
九州古代のまつり, 収蔵資料目録(考古・歴史・民俗)

東北大学文学部考古学資料図録 第1巻, 同 第2巻  
史叢 第29号

國學院大學考古学資料館要覧祭祀遺物, 壬遺跡, 中郷遺跡  
長崎・松浦皿山窯址, 東京都町田市武蔵岡遺跡, 東京・石川天野遺跡1・2次調査・滝山高燥遺跡・第8小学校裏遺跡A地区,  
東京・石川天野遺跡3次調査, 同4次調査

考古学研究室集報 第22号

神女大史学 第2号

ウフタ遺跡, 阿蘇町塔ノ木古墳群ドン塚阿蘇町御塚横穴群A・B穴

庭園文化 第5号, 同 第6号  
郵政考古紀要 'APXA'IA VI, 同 'APXA'IA VII  
貿易陶磁研究 第1号, 同 第2号

朝鮮学会

京都府立丹後郷土資料館  
京都府立山城郷土資料館  
京都市埋蔵文化財調査センター

向日市教育委員会  
長岡京市教育委員会  
田辺町教育委員会  
同志社大学校地学術調査委員会  
同志社大学考古学実習室北小松古墳群研究会  
(財)古代学協会  
長岡京跡発掘調査研究所  
田倉山団体研究グループ

辰 巳 和 弘  
吉 村 正 親  
鈴 木 重 治  
岡 本 正太郎  
服 部 定 治  
松 田 真 一  
坪之内 徹  
松 下 勝

朝鮮学報 第103輯

丹後郷土資料館報 第3号, 刺し子と裂き織り  
展示図録 南山城の歴史と文化  
平安京跡発掘調査概報, 中臣遺跡発掘調査概要, 北白川廃寺跡発掘調査概要, 中久世遺跡発掘調査概要, 鳥羽離宮跡調査概要  
京都市内遺跡試掘・立会調査概報  
向日市埋蔵文化財調査報告書 第8集, わが町の弥生時代  
長岡京市遺跡地図  
田辺町遺跡分布調査概報  
同志社田辺校地及びその周辺の地質  
北小松古墳群調査報告書  
古代文化 第284号~第286号, 平安博物館研究紀要 第7輯  
長岡京 第24号  
京都府夜久野町における玄武岩溶岩上の堆積物 <sup>14</sup>C 年代  
都田川流域の遺跡, 引佐町の古墳文化Ⅱ, 有度山北麓の古墳  
福建・浙江をたずねてー 訪中印象記Ⅱー  
福田天神遺跡  
五條古代文化 第23号  
深泥池魚釣り白書  
大川遺跡 第2次発掘調査概報, 同第3次発掘調査概報  
摂河泉文化資料 第29・30号  
淡路・志知川沖田南遺跡Ⅱ

—編集後記—

銅鐸は畿内を中心として、全国で約400個発見されていますが、今回の木津町相楽山のものは、京都府下では14個目になるそうです。なお、銅鐸が出土した丘陵の下の台地では、竪穴住居・方形周溝墓などが存在した弥生時代中期の集落遺跡（大島遺跡）が確認され、銅鐸との関係が注目されています。

「発掘調査略報」は、調査の終了した、あるいはまもなく終了する遺跡の速報です。くわしくは年度ごとに刊行する『京都府遺跡調査概報』に報告されます。「府下遺跡紹介」は、最近、古墳ばかりに集中していると反省しています。次号からは、他の遺跡も積極的に紹介する予定です。御期待ください。

（編集担当 田中 彰）

## 京都府埋蔵文化財情報 第6号

昭和57年12月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル  
中御霊町424番地

TEL (075) 256-0416

印刷 中西印刷株式会社  
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
TEL (075) 441-3155 (代)